
遥かなる時の流れの中で（アニメ映画「時をかける少女」続編的FF)

宙埜ハルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる時の流れの中で（アニメ映画「時をかける少女」続編的FF）

【Nコード】

N5235J

【作者名】

宙埜ハルカ

【あらすじ】

アニメ映画「時をかける少女」の3年後から始まる続編的二次小説。

真琴と功介は大学2年生になっていた。相変わらずの腐れ縁とつかず離れずの幼馴染としての付き合いが続いている。二人して花火大会に出かけた時、懐かしい人に声をかけられる。それは、高校2年生の時突然いなくなった千昭だった。

#00：プロローグ（前書き）

このお話は、2006年に公開されたアニメ映画「時をかける少女」の続編的二次小説になります。原作であるこの映画を見ていないと、わかりずらいと思います。

このお話は作者の勝手な妄想によるものですので、原作のイメージとかけ離れたものですし、原作及び原作の制作サイドとは何ら関係ありません。気に入らない方もいらっしやるかと思いますが、気に入らない時はどうぞスルーして頂きますようお願いします。

また、このお話は他所ブログにて公開している物を、少しづつこちらに転記したものです。

#00：プロローグ

千昭が未来へ帰っちゃってから3年。
真琴は大学2年になっていた。

「未来で待ってる」そう言った千昭。
あの時のあたしは、未来に向って走って行けば、追いつけると思ってた。

もう、二度と千昭には逢えないのだと気付いたのは、1年後の夏。
千昭と別れたあの河川敷で、沈む夕日を見ながら、
もう、戻らない夏を思っ泣いた。
そして、千昭の事は心の中に封印した。

現在、功介と同じ大学だけど、功介は医学部、あたしは文学部で美術史を専攻している。

魔女おばさんと同じ博物館の学芸員を目指してる。
本当は魔女おばさんのような絵を修復する仕事をしたかったんだけど、絵の才能は皆無だったので、諦めた。

功介とは今も腐れ縁って言うか、相変わらず会えばバカ言っ、ふざけて、時々は遊んだりしてる。

でも、医学部は忙しいらしく、あまり、かまってもらえないけどね。
え？あの時の後輩の彼女？

あの頃、同じボランティア部の彼女たちを誘って、一緒に野球したり、カラオケ行ったりしてたっけ。

私も彼女の恋を応援して、なんとか功介と二人きりにさせたり、告

白するチャンスを作ってあげたりしてた。
その後、功介と付き合っていたかどうかは分からない。

「俺に彼女ができたら、真琴が一人になるだろ」って言葉は、何度かタイムリープして時を遡ったから、功介の口からは二度と出る事は無かったけれど……

本当にそんな風に思っていてくれたのかは、今となってはわからない。

もう、千昭がいなかったからか……

今では、誰の口からも千昭の名前は出てこない。

功介さえも、言わなくなった。あたしもだけだね。

千昭が未来へ帰ったあの夏の終わり、魔女おぼさんの勤める博物館が火事になった。

原因はわからない。漏電だろうと言う事だった。

燃えたのは、千昭が見たいと言っていた絵が展示されているコーナー。

千昭が言っていたつけ、「この時代のこの場所のこの季節にしか存在の記録がなかった」って。

だから、夏休み中ずーと見張ってた。と言っても、勉強なんかもあったから、とにかく毎日博物館へ来て、絵がある事を確認していた。

その日は妙に胸騒ぎがして、魔女おぼさんに、夜だけは防火防犯システムの整った倉庫へしまってもらった。理由は言わなかった。

魔女おぼさんは、こちらが言いたくない事は詮索してこない。

それでも、何もかもお見通しのような笑顔で、「わかったわ」と一言で引き受けてくれた。

あの絵は燃えずに済んだ。

あの絵の展示期間が済み、次回公開まで倉庫へしまわれることになり、

それ以来、私もあの絵を見ていない……

千昭がどうしても見たいと言っていた絵。

未来からタイムリープしてまで見に来た絵。

不思議とひきつけられる絵……

大学2年の今は、博物館で絵の解説ボランティアをしている。

この夏休み、あの絵がまた展示されることになった。

ボランティアをしながら、ひそかに見張ろうと思っている。

何者かがあの絵を狙っているのかも知れないから……

#00:プロローグ(後書き)

少しずつこちらへアップしていこうと思っています。
お付き合い下さると嬉しいです。

#01：戻って来たアイツ

8月の初めの土曜日、大学の前期試験が済んだ頃、この街の花火大会がある。

ずーと功介と一緒に行っていたから、今年もそのつもりだった。ただ、千昭がいなくなったあの夏だけは行かなかった。なんとなく行く気が起らず、過ぎてしまった。

花火大会当日の午後。

「ねえ、今年も行くでしょ！花火大会！」

「お前は試験済んでお気楽かも知れないけど、こっちはまだレポートとか残ってんの！」

「いいじゃん、花火大会ぐらい。ほんの2〜3時間だよ。行こうよ」

「相変わらずだな。わかったよ、行けばいいんだろ！」

「浴衣着てくるんだよ。わかったあ？」

「わかった、わかった。7時前に迎えに行くから、用意しとくんぞ！」

そう言つて、功介の電話が切れた。

「おねえちゃん。功介君とデート？」と妹の美雪が聞く。妹は今、

あの頃の私と同じ高校2年生。

「バ、バカ。そんなじゃないよ。彼女のいない功介が可哀想だから、付き合っただけなの！」

「ふん。お姉ちゃんだって、彼氏ないくせに……」

「うるさい！」

7時前に功介が迎えに来た。まだ、外はうつすらと明るい。功介は紺地に細かい模様が入った浴衣を着て、団扇を帯の後ろのさしている。

「あら、功介君、こんばんは。なかなか浴衣似合ってるじゃない。」
真琴の母親が、迎えにきた功介に声をかける。

「あ、こんばんは。真琴は？」
恥ずかしさを素っ気ない言葉で隠しながら、功介が言った。

「まこと。功介君来てくれたよ」と、母親は家の中に向かって、真琴を呼んだ。

はい と返事をしながら、お待たせと真琴が出てきた。

高校生の頃よりずーと伸びた髪をポニーテールにして、紺地にきれいな色の花の模様が生える浴衣を着ていた。去年までとは違う浴衣。

「お、馬子にも衣装だな」

一瞬見とれていたような功介が、我に返って憎まれ口を叩く。

花火大会の会場の河川敷まで、大勢の見物客に交じって歩いて行く。
千昭と最後に別れたあの河川敷……
千昭にも見せたかったな、あたしの浴衣姿……
毎年この季節になると、思い出してしまう。

二人して、土手に座って空を見上げる。夜空に大輪の花火が咲く。
ドーンと言う音がお腹に響いてくる。

「たまや〜」真琴が夜空に向かって大きな声を出した。

「おい、恥ずかしいだろ」

「花火大会なんだから、いいじゃん」

「おまえ、もう二十歳なんだから、もう少し女らしい言葉遣いしろよ。」

「なによ、あたしの勝手でしょ」

その時、ふいに後ろから、聞き覚えのある笑い声がした。

「おまえら、相変わらず一緒にいるのか？」
その声は笑いながら言った。

驚いて振り返った二人が見たのは、あの頃と変わりのない笑顔の千昭。

「ち、ちあき……」震える声で、やっと言った真琴。

「千昭、今までどうしてたんだ。連絡もないし……」驚きと腹立ちを押し殺して、功介が言う。

「留学先から帰って来たんだよ」しれっとして言う、千昭。

3年の年月が、スルスルと巻き戻って行った。

#02：自棄の乾杯

千昭と別れた河川敷で、また千昭を目の前にすると、3年の時間を飛び越えて、

あの夏の日の続きのような気になった。

まるで、タイムリープしたように……

「おい千昭、こっちにいつまで居られるんだ？」

功介が真琴の隣に座った千昭に聞く。

「そんなに長くは居られないかな？」とあいまいな返事。

「それより、真琴、浴衣姿、なかなかイケるじゃん。」

今度は真琴に向かって、へらへらと笑って言う千昭。

真琴は軽く千昭を睨んで言った。

「ずるいよ千昭。突然戻ってくるなんて……」

ははは……と笑われて、また、誤魔化された。

その時、花火大会は最後のスターマインが打ち上げられた。

3人の目の前に繰り広げられる、光と音のファンタジー。

次々に開く光の花々を、3人は無言のまま見入っていた。

そっと、横を盗み見た真琴は、光の花が開くたびに輝く千昭の横顔が幻のような気がした。

花火が終わって、河川敷きの堤防道路をぞろぞろと人々が家路に向

かう。

「千昭、今から飲みにいかなか？」

人ごみの中、流れに流されながら、功介が千昭に声をかけた。

「おーいいね。行こう、行こう。真琴も行くだろ。」

上機嫌の千昭は、軽い調子で真琴に声をかける。

「あたし、浴衣だし……時間遅いし……功介、レポートあったんじゃないの？」

千昭との再会は嬉しいはずなのに、なんだか面白くない。

「なんだ？真琴。レポートなんて関係ないだろ。せっかく千昭が戻ってきたんだから、付き合えよ。」

功介が、空気読めない奴だなと言わんばかりの表情で言う。

「わかったよ」一人ふて腐れて真琴は呟いた。

功介は20歳になってから、友達とよく飲みに行くようになったらしい。

あたしも一度だけ連れってもらった居酒屋で、3人でテーブルを囲む。

「千昭との3年ぶりの再会を祝って、かんぱーい。」
やけに上機嫌で功介はビールのグラスを上げた。

千昭も陽気に乾杯をする。

……なによ、功介だって千昭がいなくなった時は、怒っていたくせ

に！

……あたしがどんな気持ちでこの3年間過ごしたと思ってるの！

真琴は、心の中で文句を言いながら、二人を睨んで、自分のグラスを二人のグラスに打ちつけた。

#03：戻る時間、戻る機嫌

「それで、千昭はこの3年間、どこで何をしてたんだよ？」

功介は、乾杯のノリのまま千昭に聞くが、目は笑っていなかった。

「いやー、特に報告するようなことは何も無いよ。それより、お前から二人、付き合ってるのか？」

相変わらず、へらへら笑ったまま、千昭が質問を切り返した。

「バカ言つなよ。コイツとは幼馴染の腐れ縁ってやつさ。花火行く彼氏もいないから、付き合ってたただけさ。」

「なによ！それはこっちのセリフ！」

功介の言葉に触発されて、真琴の不機嫌はエスカレートした。

「まこと、何怒ってたんだよ。せっかくの再会なのに、もっと楽しく盛り上がるうぜ。」

千昭は上機嫌で、真琴のグラスにビールを注ぎ足した。同じように功介のグラスにもビールを注ぐ。

「千昭、何も報告する事無いって、どういう意味だ？何やってたか、話せないのか？」

功介は真面目な顔で、千昭が注ぐビールをグラスで受けながら言った。

「ちょっとヤバい事に手を出していたんでね。危なくなつて戻って来たのさ。」

ニヤリと笑いながら言う千昭の言葉に、功介も真琴も絶句した。

「ははははっ・・・、本気にした？」

いたずらっぽい目で二人を見ながら、大笑いする千昭。

・・・呆れて何も言えない・・・

「本気にしかけたぞ。冗談でそんな事言うなよ。」

功介は真面目な口調で言っているのに、もう眼は笑っていて、千昭にパンチを繰り出していた。

「それで、本当は何してたんだ？」と改めて聞く功介。

「世界中の絵を見て歩いてた」千昭は遠い眼をして呟いた。

功介も真琴もそんな千昭を改めて見つめた。

「おまえ、絵なんかに興味あったのか？」

「ああ、親父が画家なんだ。」静かに答える千昭。

え〜〜〜！と驚いた声を上げる真琴。

なんだよ　と千昭に睨まれ、うるさいぞ　と功介に叱られた。

そんな二人のリアクションが、高校生の頃のように嬉しくなった。

「そんな事より、おまえらはどうしてたんだ？」
千昭が穏やかな笑顔で聞く。

「俺は、あれから。。大学の医学部目指して勉強して、今その大学の医学部の2回生さ。」と功介。

「あたしは・・・今、功介と同じ大学の文学部で美術史を専攻してる。」と真琴。

「へえ、真琴、功介と同じ大学に入れたの？」千昭がニヤニヤ笑いながら聞く？

「そりゃ俺の勉強時間を奪って、ずいぶん協力させられたもんない！」

同じように功介もニヤニヤ笑って言う。

「大学入れたのは、あたしの才能だもん。」

言ってる！ と、功介に頭をはたかれ、千昭はニヤニヤ笑ったまま。

すっかり、高校時代に時間は戻り、真琴の機嫌も戻って行った。

#04：3人のバランス

次の日は日曜日だったので、真琴は解説ボランティアのため朝から博物館にいた。

昨夜、高校時代に戻ったように、3人で盛り上がり、その後、カラオケにも行った。

陽気に飲んだお酒と歌いまくったため、初めての二日酔いとかすれた声……

とても、ボランティアでできる状態じゃないけれど、昨日から公開になっていたあの絵を見張るため、気分の悪さもガンガンする頭にも鞭打って、やって来た。

「おはよう。なあに？真琴。死んだ魚みたいな眼をしてるよ」

一緒にボランティアをしている同じ学部ななみの七海が、真琴を見るなり言った。

真琴はひきつった笑顔を貼り付けて、おはよゝとかすれた声で言う。

「なんなの？真琴、その声。風邪でも引いたの？無理して来る事無かったのに」

真琴は首を振りながら、手を合わせ、床を指さして、頭を下げた。そのジェスチャーと一緒に喉から絞り出したかすれた声で

「ちがう、おねがい、ここに、いさせて」と言った。

「わかった、わかった。でも、目立たないように奥に引っ込んでるのよ。今日はボランティア無理でしょ」

七海は呆れかえった顔でテキパキと言うと、首から名札を下げてカウンターに立った。

しばらくすると、魔女おばさんが真琴の様子を覗きに来了。ボランティアを始めてから、1日1回は覗きに来てくれる。

「真琴、どうしたの？」

カウンターの奥でイスに座ったまま、ぐったりとしている真琴の様子を見て言った。

その声に顔を上げると、また、ひきつった笑顔とかすれた声で

「魔女おばさん、二日酔いな」と、すぐるように言った。

「ふふふ、真琴もそんな歳になったんだ。いらっしやい、熱い緑茶を入れてあげるわ」

博物館の魔女おばさんの部屋は、相変わらず資料やら本なんかがいたるところに積み上げられている。その中を避けながらソファにたどり着いて、座り込んだ。

魔女おばさんが、入れてくれた緑茶を飲む。熱いお茶が喉に染みる。少し、気分も喉の状態も良くなったようだった。

「二日酔いなんて、どうしたの？」

「うん。千昭が戻って来て、功介と3人で宴会してた。」

「へえ、千昭君帰って来たの？」

「うん。」

声を出すのが少し楽になった。

「それで、3人で同窓会してたんだ。功介君や千昭君の名前、あれ以来、真琴の口からあまり出なかったけど、3人集まればまた昔のように仲良くできるんだね。」

魔女おばさんは、一人と言って、一人で納得している。あれ以来と言うのは、千昭がいなくなってからの事。

そうか・・・功介の話もしていなかったっけ・・・千昭の事を思い出すから、言わなかったのかも知れない。

魔女おばさんに千昭のことが好きだと話した事も、最後のタイムリープで話さなかった事になってしまった。もう、あれからは何も言っていないんだ・・・

3人じゃなくなった時点で、バランスが崩れたように功介とも以前のように遊べなかった。後輩の彼女に気を使っただけ言うのもあったけど・・・

でも、相変わらず優しい功介は、受験の時は助けてくれたし、会えば昔のようにふざけてくれる。花火だっけ行こうと誘えば、断らないし・・・

功介との微妙な距離感は、もう子供じゃないって思い知らされる。

でも、千昭が戻ってきた事で、また3人のバランスがうまくとれた

ような気がした。

#05：絵の秘密

午後になると、ずいぶん気分が良くなった。午前中一杯、おぼさんの部屋で休ませてもらっていたお陰だ。ボランティアの受付カウンターへ戻ると、退屈そうな七海がいた。

「真琴、もういいの？二日酔いだって？」

「うん。ありがとう。高校の時の友達が返って来たからさ、盛り上がっちゃってね」

「そうなんだ・・・でも、気をつけなよ」

「うん」

七海はさっぱりしていて、人の事を深く詮索しない。そんなところが、一緒にいて楽しい友達だった。

声もずいぶん良くなって、受付カウンターで案内する程度はできそうだったので、七海と一緒に並んで立った。

午後半ばが過ぎた頃、カウンターに近づく足音があった。

「真琴」と呼ばれて、顔を上げると千昭が立っていた。

「あ、千昭、来たんだ。」

七海には、千昭の事話したこと無かったから、照れ隠しにあわてて紹介した。

「七海、さっき言ってた高校のときの友達の千昭」
どうも・・・とお互いに少し頭を下げた千昭と七海。

「おい、真琴、解説してくれよ。」と千昭に連れ出され、ガラスの中に展示された絵を見て行く。

千昭の目的はわかっていた。でも、すぐ目的のところへ行かない千昭に付き合っ、順番にまだ少しかすれた声で絵を解説していく。

「おまえの声、昨日の後遺症？」と聞く千昭に、「うん」と頷くと、「歌い過ぎ！」と笑われた。

そして、あの絵の前まで来た。

【白梅二椿菊図】

「千昭、知ってたんでしょ。又この絵が展示されてる事。」

「ああ」

「あたしが、未来まで残すって言ったのに、心配になって見に来たの？それとも、未来には残っていなかったの？」

「そう言う事じゃないんだ・・・」

そう言っただけ千昭は絵を見つめ黙ってしまった。
二人して黙ったまま見つめる絵。

「この絵は親父が描いた絵なんだ・・・」千昭がポツリと言った。

え？と、思わず千昭の方を向いた真琴。

「この絵、何百年も前の絵なんだよ！」

真琴は魔女おばさんに聞いた話を思い出し、驚いて言った。

「ああ、そうだよ。」

・・・・・・・・・・

親父が若い頃、絵を描くために過去にタイムリープしたんだ。

そこで、大怪我をした親父は、一人の女性に助けられ、

その女性の家で世話になった・・・

いつしか二人は愛し合うようになり、一緒に暮らし始めた。

その時代は徐々に戦争へと向かう時代で、二人もいつしか巻き込まれていった。

そんな中、親父はその女性をモデルに絵を描いた。

自分の想いを込めて・・・・・・・・

・・・・・・・・

二人の間には子供が生まれたけれど、その女性は戦争に巻き込まれ亡くなった。

親父はその子供を連れて未来へ戻った・・・

・・・・・・・・

その子供が俺さ・・・・・・・・」

千昭は独り言のように淡々と話した。

絵を見続けている千昭の横顔を見ながら聞いていた真琴は、千昭が
どうしてこの絵に執着するのかがやっとわかった。

「この絵の人は、千昭のお母さんって事？」

「ああ、親父が亡くなった後、日記を発見して知ったんだ。

だから、どうしてもこの絵が見たかった。

どれだけ遠くにあっても・・・

何処にあっても・・・

どれだけ危険でも・・・

見たかった絵・・・

見られてよかった・・・

心に焼き付けた・・・

一生忘れない・・・

ありがとう、真琴」

千昭の眼から一粒涙が流れたのに気づいた。

「え？私、何にもしてないよ」

「おまえが火事から守ってくれたから・・・
本当にありがとう、真琴」

真琴は込み上げるものを我慢しながら、小さく頷いた。

#06：タイムリープのルール

博物館からの帰り、真琴は千昭と一緒に3年前と同じあの河川敷の土手にいた。

いつの間にか、二日酔いは治まっていた。声はまだ少しかすれていたけれど……

土手に二人で座り、川向うの高速道路とビル群の向こう側に沈みかけている太陽を見ていた。

「ねえ、千昭。今度ナイターに行かない？ 功介さそって3人で。」
真琴は二人を取り巻いている重苦さを振り払うように、明るく言った。

「う、うん。」

千昭はどこか上の空で答える。

「いや、この時代には長くいられないんだ」

そう言う千昭の言葉は、真琴にタイムリープの存在を思い出させた。

「千昭、どうして戻って来たの？ あの絵を見るため？」

真琴は千昭が戻って来てから、ずっと気になっていた事を口にした。

「真琴に逢いたかったからさ」

千昭は、川の方を見たまま呟く。

「え？」

思わず千昭の方を見ると、穏やかに笑っていた。

「それと……」

「それと？」

「本当はもう何も言わずに行こうと思ったけど……
いまさら言っても、もう同じだけど……」

千昭は、少し言いあぐねて、川向うの夕日の色に染まった高速道路を見つめていた。

そして、心を決めたように話し出した。

「タイムリープにはいろいろな細かいルールがあるんだ。一番大切な事は、歴史の傍観者である事。それから、タイムリープした先の時代の人にタイムリープの存在を知られてはいけない事。そして……」

また、言いあぐねている千昭を、勇気づけるように真琴は黙って見つめていた。

千昭はそんな真琴の眼差しに気づき、また、話し始めた。

「そして……タイムリープした先の時代の人と関わりを持った場合、必ず自分に関する記憶をかかわった人々の記憶から消さなければいけないんだ。」

「え？あかし、千昭の事、覚えてるよ……」

「ああ。だから来たんだ。もう一度……全てを元に戻すため……」

「え？どういう事？」

「ごめん、真琴・・・

おまえに忘れてほしくなくて・・・

覚えておいて欲しくて・・・

記憶を消す事が出来なかった・・・

でも、それはルール違反で・・・

おまえの人生さえも変えつつある。

それに・・・あの絵が残ってしまった事が、少しずつ未来に影響を及ぼしているんだ。」

苦しげに話す千昭は真琴と眼を合わせるのを避けるように川の流れを見続けていた。

「千昭の事、覚えていちゃいけないの？千昭との思い出も忘れなきやいけないの？」

真琴は、千昭の話を理解できず、すぐるように聞いた。

#07：記憶の隠しポケット（前書き）

今回の「記憶の隠しポケット」と言う言葉ですが、
TBSドラマ「MR・BRAIN」ミスターブレインの中でキムタク扮する九十九さ
んが言った言葉です。
その話をヒントにさせて頂いてます。

#07：記憶の隠しポケット

真琴のすぐるような眼差しを、千昭は優しく温かい表情で包むと、真琴の反対側の腕に手をかけてグッと引き寄せた。

高校生の頃には考えられない千昭の態度に真琴の心臓はドキドキと飛び跳ねた。

引き寄せられた反動で真琴の頭が千昭の胸に触れる。

しばらくそのまま、何の心配もしなくていいとでも言うように千昭の心臓の音が優しく耳に響いていた。

「なあ、真琴。人間の記憶ってさ、表面上のメモリーは絶えず書ききされて、

いろいろな細かい事や特に印象に残らない事なんかはどんどん忘れて行く。

でも、誰かを好きになったり、愛したり、愛されたって言う一番純粹な気持ちは、

表面上のメモリーだけじゃなく、脳の奥の記憶の隠しポケットにしまい込まれるんだ。

それは心に焼き付けたように、消える事のない記憶なんだ。

・・・タイムリープした先の人々の記憶を消すのも、その表面上のメモリー部分。

記憶の隠しポケットにしまった記憶は消えないんだよ。」

遠い眼をして話す千昭の言葉が、耳をあてた胸を通じて響く。

「どういう意味なんだろう？記憶を消しても千昭の事は忘れないって事なんだろうか？

真琴は黙ったまま千昭の顔を見上げると、千昭もじっと真琴を見る。そして、千昭はふっと笑うと、話を続けた。

「俺はズルイんだ。

本当はこの時代に戻らずに3年前のあの夏の日に戻って

俺に関する記憶を全て消さなきゃならなかった。

でも、それだと、真琴の記憶に俺の事は残らないような気がして、もう一度真琴の前にこうやって姿を現した。

真琴の心に俺の事焼き付けて欲しくて、記憶のポケットに俺の事をしまつて欲しくて・・・

真琴にだけは忘れて欲しくなかったんだ、俺の事。」

千昭の言葉がだんだんとかすれていく。

泣いているの？と千昭の顔を見ると、涙は流れていなかった。

私だって忘れたくない。

真琴の腕にかけた千昭の手に、また力が入って引き寄せられる。

もう一方の手が頭を引きよせ、千昭の胸に頭をだかえられたような形になった。

千昭の胸に触れた耳から聞こえる心臓は、まるで泣いているように震えていた。

「千昭・・・」

真琴は千昭の名を呟くと、千昭の胸に両手を回した。

そして、心の奥にしっかりと千昭の存在を焼きつけるように、記憶のポケットにそっとしまい込むように、二人はしばらくそのまま抱き合っていた。

それはまるで、時間のはざまを漂うように、そこには二人だけしか存在していなかった。

#08：風と共に消える

その時ふいに携帯電話が鳴りだした。

とたんに現実に戻された二人。驚いて体を離す。一瞬見つめ合った後、真琴は慌てて鞆の中から携帯を取り出した。

功介からだった。

「もしもし」

『おー真琴、千昭そっちへ行っただか？昨日、博物館へ行くような事言ってたから。アイツの携帯、もう解約されてたし・・・連絡付かないんだ』

「千昭なら、ここにいるよ。代ろうか？」

『おー、頼む』

功介からだよ、と言って千昭に携帯を渡す。

「もしもし、功介、何？」

千昭と功介が電話している間、真琴はさっきの事を思い出していた。記憶を消す・・・未来の人々はそんな事を当たり前のように出来るんだ。それは歴史を変えないために仕方のない事かも知れないけれど・・・なんだか背筋がゾツと寒くなった。

タイムリープによって生まれた出逢いは、始めからあってはならない出逢いだったと言うのか？そうだとすると、遠い昔に生まれ、未

来で育った千昭の存在自体が危うくなってしまふ……
いいえ、タイムリープによる千昭との出逢いは、もともと運命に組み込まれた出来事なんじゃないのだろうか？

「真琴」

千昭が私の名を呼んで、携帯を差し出した。電話は済んだらしい。

「あ、功介、何だつて？」

私は何気なく聞いたのだけど、千昭の表情は硬い。

「ああ、明日のナイターのチケット取れるから、行かないかって」

「功介も考える事、私と同じだね。それで、何て答えたの？」

「もう帰らなくちゃいけないから、無理だつて……」

そう答えた千昭の視線はどこか遠くを彷徨ったまま、定まらずにいた。

「千昭……」

二人の間にある現実を思い知らされる。

タイムリープとか未来とか記憶を消すとか、まるでSFの世界……
ばか、嘘だよって、言つてよ。千昭……

もう、こんな思いするなら、本当に綺麗さっぱり記憶を消し去ってもらった方がいいのかも知れない……

「ごめんな、真琴。」

もう、行かなきゃならない。

お前のおかげで、絵を見る事が出来て、本当にうれしかった。
ありがとう。

もう、逢う事は出来ないかも知れないけど、

真琴に逢えて、嬉しかった。

真琴の事は、ずーと忘れないから、

真琴がどこにいても、見守っているから・・・

・・・・・・

俺にとって、本当に生きてるのが楽しいって思えたのは

真琴や功介と過ごしたあの数カ月の日々だったんだ。

忘れない。いつまでもずーと。

たえ、お前が忘れ去ってしまっても・・・」

そう言うと、千昭の体は風と共に時間の狭間に消えて行った。

#08：風と共に消える（後書き）

これで第一章の終りです。

全体に短めの更新なので、まとめて更新してみました。
今後の展開もお楽しみくださいな。

#01：心の奥の痛み（前書き）

第二章が始まりました。

千昭の記憶を消されてしまった真琴は、思い出すことができるのでしょうか？

今後の展開をお楽しみくださいね。

#01：心の奥の痛み

川沿いの桜の花が、今年もまた夢の時を終えて、風に乗って枝から旅立って行く。

毎年、変わらぬ風景。

真琴は川沿いの堤防の道を自転車をひいて歩きながら、どうしてもここに来ると胸が締め付けられるような思いになるのだらうと、考えていた。

ここで、沈む夕日を見ていると、何か、大切な何かを忘れているように……

心の奥底に見えそうで見えない誰かの顔がある事に、ずいぶん前から気付いていた。

けれど、記憶のメモリーに該当の情報が無い。

その心の奥にある記憶はとても甘美で、けれど、それ以上踏み込む事を拒むように、いつも思い出そうとすると胸がキュッと苦しくなる。

今日もまた、首を振って何とも言えないこの想いを振り払った。

不意に携帯の着信音が鳴った。

自転車の前かごに入れたトートバッグから携帯を取り出す。

名前を確認してから、携帯を開いてボタンを押し、耳にあてた。

「久しぶりー功介。」

『ああ。真琴、今週の金曜の夜、暇？』

「ん……たぶん。」

『久々に飲みに行かないか？』

「え？ほんと！行く行く。他に誰か来るの？」

『ああ、尾崎オザキともう一人来るかも』

「そう、だったらあたしも友達二人連れて行ってもいい？」

『大歓迎、大勢の方が楽しいし……』

「よかった。場所と時間決まったら、またメールして」

『了解、またな』

「バイバイ」

電話を切ると、さっきまで感じていた胸の奥の苦しい何かの事はすっかり忘れ去っていた。

幼馴染の津田功介とは幼稚園から小学校、中学校、高校、そして大学3年の現在に至るまでずーと一緒だ。その間、異性だと意識した事も無く、腐れ縁のごとく、つかず離れずの関係を保っている。高校生の頃までは毎日のようにじゃれ合って遊んでいたけれど、大学に入ってからはお互いいろいろと忙しく、逢う事も少なくなってきた。

それでも、毎年一緒に花火に行ったり、時々カラオケや飲みに行ったりする。近頃はたいがい功介の友達も一緒だったりしていた。

次の日、早速友達の岩瀬七海イワセナナミと早川美浪ハヤカワミナミに声をかけた。

「ねえー、ねえー、今週の金曜日の夜、暇？」

「ん？何？」

眠そうな目をした七海が、立っている私を見上げて聞く。

隣に座っていた美浪も同じように顔を上げ、少し頭を傾げた。

「功介が飲みに行こうと言ってるんだけど、一緒に行かない？向こうも友達来るみたいだし」

私は二人の傍に座りながら、説明した。

「功介君って、医学部の幼馴染の人？」

美浪が少し恥じらったような顔をして尋ねた。

「功介君の友達って、やっぱり医学部だったりするの？」

美浪の質問に答える前に、七海が同じように質問をぶつけてくる。

そう言えば、1年の時から仲が良かった七海には何度か学食で功介に会った時に紹介してるけど、美浪はまだ最近親しくなったので、功介の事は話だけで、逢った事が無かった。

「そうそう、医学部の幼馴染。友達も医学部だと思う。功介の友達で同じ医学部の尾崎君も来るらしいし、もう一人来るって言ってた。」

「へえー合コンみたいだね」

ニヤツと笑って七海が言う。

「え？そうなの？」

美浪は七海の言葉に少し焦っている。

「んゝそんな堅苦しく考えなくっていいって。友達同士の集まりなんだから……行くでしょ？」

どうも美浪は男の人がいるだけで緊張するタイプなので、慣れるためにもいい機会かも、って思ったから、私は少し強引に話を進めた。

「みんなが行くなら……」

美浪の返事にニンマリしながら、七海を見ると　もちろんよと言わんばかりに笑顔で頷いた。

金曜日の夜7時、功介と行くいつもの居酒屋に七海と美浪と共に行くと、男子3人はすでに来ていた。どうも、5時限目が休講になって、少し早い目に来たらしい。テーブルにはもう既にいろいろな料理が並んでいた。

「功介、おまたせ。尾崎君、お久しぶり。」

ふすまで区切られた座敷に入るなり、元気に声をかけた。

「よっ、いつも元気だな。後ろのお嬢さん方を紹介してよ」

功介はニヤニヤ笑いながら言う。

「とりあえず席に着いてから、自己紹介タイムだよ。なんか合コンのノリだけど……」

そう言いながら、男子三人の前に女子三人が並んで座った。

「それじゃあ、医学部のイケメン3人から自己紹介してもらおうか？」

男子に主導権を取られてなるものかと、真琴は余裕の笑顔で仕切ってみた。

「イケメンと紹介されたからには、俺から……医学部3年津田功介、しかたなく真琴の幼馴染やってます。真琴以外のお二人さん、よろしく！」

情けなさそうな顔して言う功介に、「それ私のセリフ！」と突っ込み入れた。

なにが、しかたなくよ！自分から誘っておいて……！！

「俺も功介と同じ医学部3年って、みんな医学部3年だけど……大学入ってから功介とずーとつるんでる尾崎順平、高校の頃はバンドとかやってたけど、今は真面目な医学生。よろしくね」

そう言う尾崎は、昔から変わらぬスポーツ刈りの功介と対照的で、茶髪のゆるいウェーブのかかった少し長めの髪。黙っていると一重の黒目がちな目が睨んでいるようだけど、笑うとたれ目になって、その下の丸い鼻と小さな口が可愛らしく見せている。本人は童顔で嫌だそうだけど……まあ、いつも元気なムードメーカーって奴？

バンドやってた頃は金髪にしていたんだって……それでも、医学部に入れるくらい頭いいんだから、腹立つよね。

「俺は、早瀬智明、ハヤセチアキ漢字だとみんな「ともあき」って読むけど……女みたいな名前で嫌なんだけどな。まあ、よろしく」

真琴にとつては初めて見る功介の友達。

チアキって言うのか……そう思った時に、心の奥で何かが跳ねた。早瀬智明は、明るめで赤茶色の洗いたてのようなナチュラルヘア。前髪が長く顔にかかっているにも気にせず、その隙間からのぞく鋭い眼光の眼は一匹オオカミを思わせるような冷たさがあった。

彼の顔を見た時、なぜだか懐かしさと共に、いつも夕方の川辺に行くと感じる心の奥底の小さな痛みを感じていた。

#02：席替えタイム

全員の自己紹介が済んだところで乾杯をし、「席替えをしましゅう！」と尾崎君がニツコリ笑って言った。

まったく、合コンのつもりなの？と心の中で愚痴りながら、尾崎君が指定するように、男女交互に座った。

「いやー一度、真琴さんとゆつくり話をしたいと思って、ずーと功介をお願いしてたんですよ。」

尾崎君は隣に座るなり、たれ目の目で笑って言った。

七海は功介と、美浪は早瀬君と隣り合って喋り始めた。

自分でも気付かないうちにチラチラと早瀬君の方を見ていたようだ。

「ん？早瀬が気になるの？」

そう尾崎君に言われて、その事に初めて気づいた。

「なんだか前にあった事あるような気がして・・・」

「もう3年だから、キャンパス内で見かけたんじゃないのか？」

「見かけた程度じゃないような気がするんだけど・・・でも、名前は初めて聞いたし・・・」

この名前さえ何か引つかかるものを感じる・・・
なんだろう？この感覚は・・・

「まさか、真琴さん、アイツに一目惚れしたなんて言うんじゃないだろうな！」

「ま、まさか・・・」

話が妙な方へ流れ出したので、心の中のモヤモヤを追いつき、話を変えた。

「そんな事より、尾崎君はバンドでは何の楽器してたの？」

バンドの話になったら、とたんに嬉しそうな顔になって話し出す尾崎君の顔は、どちらかと言うと可愛い感じ・・・この顔でメスとか持つて手術するかと思うと、勘弁して下さい・・・って感じ？って手術は顔でするんじゃないっての！

そんな事思いながら、尾崎君の話に相槌を打ちながら、話を聞いていた。

「ところでさ、真琴さんは、もうゼミは決めたの？」

尾崎君はバンドの話を一しきり話した後、こちらに話を振って来た。

「ん・・・考古学の方へ行こうかと思って・・・」

「へえ、もしかして、村井ゼミ？」

村井教授は、宗教的な遺跡の発掘、修復等で日本内外から高く評価されている人物だった。

国内で新しい遺跡などが発見されると、よくテレビなどで解説していたりする。

「うん。でも希望者多そうだけどね・・・」

「なんだか、意外だったな・・・」

「友達にも言われた。真琴のイメージじゃないって・・・」

「それ、功介だろ！」

「ううん。女友達。功介にはまだ言っていないの。どうせ、似合わないって言われるだろうし・・・」

そんな話をしている内に2回目の席替えタイムになった。
次に隣になったのは功介。

「なんだ、真琴かよ。」

あたしはニツコリ笑って睨んでやった。

「まあ、久々だよな。真琴と話すんのも・・・」

「まあね。それより、早瀬君ってどこかで会ったような気がするんだけど・・・出身はどこなの？」

「真琴もか？俺も初めて会った時、妙に懐かしい気がしたんだ。誰かに似てるのかな？あいつは隣の県出身らしいから、大学までは会った事ないと思うんだ。2人で一緒にいる時に会ったのかな？」

「え？功介もそう思うの？そうそう、懐かしい感じ・・・昔によく似た人に合ってるのかもね・・・」

懐かしい・・・そう懐かしいんだ。
でも、その懐かしさは、どこか痛みが伴っている気がした。

早瀬君の話はそこで切り上げて、二人に共通の小学校や中学校、高校の時の友達の近況を面白おかしく伝えあった。

最後の席替えタイムで、初めて早瀬君と話をする事になった。
他の子と話していた時、それほど話が盛り上がった風でも無かった。

早瀬君って無口なのかな？

「功介の幼馴染の真琴さんだよね」
早瀬君は確認するように言った。

あたしは、笑って頷くと、みんなに聞いたのと同じように早瀬君にも問いかけた。

「ねっ、以前に私たちって会った事ある？ なんだか早瀬君の事、初めて会う気がしないの。」

「君もか・・・」

「え？ どういう事？」

「功介も初めて会った時、そんな事言ってたから・・・」

「さっき、功介とも話してたの。やっぱり良く似た人と会ってるのかも、って」

「俺みたいなイケメンによく似た奴なんていないだろ」

思わず笑ってしまった。無口だと思っていた早瀬君でも、こんな冗談言えるんだ。

そう思ったら、なんだか急に親しみを感じてしまった。

「もおー早瀬君ったら・・・」

早瀬君は何か悪戯を考えているようなニヤリとした笑顔で、真琴の耳に口を近づけ、他の人に聞こえないような声で囁いた。

「俺の事、わすれたのかい？真琴」

#03：恋愛経験値（前書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

今回は、以前にもありましたが、TBSテレビで以前放映された「MR・BRAIN（ミスターブレイン）」のキムタクが演じた脳科学者の九十九さんのセリフを大いに参照させて頂きました。どうぞ、ご了承ください。

#03：恋愛経験値

「・・・・・・・・」

思考の速さよりも、頬が熱を持つ方が早かった。

真っ赤になってフリーズしている真琴を見て、堪らず笑いだした早瀬。

「な、なに！」

彼の笑い声に思考が現実を追いついた。

「冗談だよ。真琴さん」

そう言っただけでまた笑いだした早瀬の目の奥がキラリと光ったのに、真琴は気付く事は無かった。

そんな二人の普通じゃない様子に気づいた功介は一瞬早瀬を睨み、真琴に声をかけた。

「真琴、どうした？大丈夫か？」

「う、うん。早瀬君が冗談言うから、ビックリしちゃった」

ぎこちない笑顔で答えながら功介の顔を見ると、なんだか怒ってません？

「早瀬、真琴に何を言ったんだ？」

「なんだよ。ちょっと冗談言っただけだろ。なっ、真琴さん」

「真琴は冗談なら一緒に笑い飛ばすんだよ！こんなに動揺してるのは・・・まさか、セクハラ発言してないだろうな？」

「こ、功介、止めてよ。そんなじゃないから。大丈夫だから・・・」

そう、大丈夫。こんな事で動揺していてどうする、真琴。

真琴は自分を叱咤して、いつものように笑い返した。

「ごめん。ちょっと冗談が過ぎたみたいだな。悪かった。」
みんながそれぞれの会話に戻ると、早瀬は謝罪を口にした。

「いいのよ。ちょっと驚いただけだから・・・」

「さっき俺の事、初めて会った気がしないって言ってたけど、あんなに動揺するところを見ると、何か思いだしたんじゃないのか？もしかして、好きだった人だとか・・・」

一瞬驚いて目を見開いて早瀬を見た真琴は、徐に首を振った。

「ううん。どんなに考えても、思い出せないの。でも、一つわかった事がある。」

真琴はここまで言うと、手に持ったままのグラスに入ったぬるくなったビールを一口飲んだ。口に広がる苦味・・・そして、喉を通して行く気の抜けたビールに、顔を歪めた。

「ん？何がわかったの？」

真琴の様子を見つめ続けていた早瀬は、話の続きを催促した。

「ほら、夏に花火大会が行われる河川敷きあるでしょ。あそこへ行くとなぜだか胸が苦しくなるの。心の奥底に誰かの存在を感じるんだけど、その人が誰なのか分からないし・・・思い出そうとすると、切ないような、苦しいような気持ちになって・・・それが、早瀬君を見た時、同じような気持ちになったんだ。だから、心の奥底に記憶された人は、早瀬君に似た人なんだと思う。でも、その人と私の関係については、思い出せないのよ。」

ここまで言っていると、真琴は一つため息をついた。

そんな真琴の話を黙って聞いていた早瀬は、先ほどまでの表情とは打って変わって、いたって真面目な顔になり、静かに語り出した。

「俺さ、大学で脳科学について研究しているんだ。脳の事ってまだまだ解明されていなさが多くってさ。例えば、人の記憶にしても、忘れてしまったようできて、脳の奥にしまわれていたりする事があるんだ。昔好きになった人の事だって、時間の経過と共に顔や声やその人と話した事や過ごした時の事なんか忘れてしまう事があるだろ。長らくその人に会う事なく、また、別な人と出逢って新たな恋愛を繰り返している内に、余計に忘れてしまう。だけど、何年かぶりにその人と偶然にあったりなんかすると、好きだった気持ちがふつと蘇ったりするんだよ。人を好きになった気持ちの記憶って、ちゃんと残ってたりするんだよ。」

早瀬は眼を細めて、話しながら真琴の方を見た。

・・・早瀬君は一体何が言いたいのだろう？

「それって、早瀬君に似た人をあたしが以前好きだったって言う事

なの？」

早瀬の話をいまいち理解できない真琴は、すかさず聞き返した。

「いや、その可能性もあるかなと思って・・・思い出そうとすると切なくて苦しいって言っただろ、それって切ない恋をしていたんじゃないのかなあ？」

人間の記憶って脳の中の海馬と大脳新皮質　と言ったところに記憶されるんだけど、それ以外にも記憶の隠しポケットがいろいろあって、一番純粋な人を愛する気持ちって脳の一番深い所の大脳辺縁系にしまわれていると言われてるんだ。だから、普段は思い出さないけれど、その人に会ったり、その人との記憶につながる重要な事に遭遇すると、その記憶がよみがえってくるんだと思うよ。」

何となく分かったような気がしたけれど、まだ納得できないような顔をしたまま真琴は頷いた。

真面目な顔で話す早瀬は、最初に感じた懐かしい気持ちは感じられず、全く別人のようだった。

・・・それにしても、だ。

自分が好きになった人の事、全く忘れてしまうつて事あるのだろうか？

普段は忘れていても、思い出そうとしたら、思い出せるんじゃないだろうか？

いやいや、それ以前にあたしが今までに、誰かの事を真剣に好きになった事なんてあっただろうか？

「ねえ、早瀬君。あたし、誰かを真剣に好きになった事って無いよ
うな気がするんだけど。」

「へえ、真琴さん、二十歳過ぎているのに、恋もした事ない？冗
談だろ？」

「悪かったわね！今まであたしの周りに恋したくなるような相手が
いなかっただけよ」

言いながら、なぜか虚しくなった。

あたしって・・・この年になるまで、恋愛経験値ゼロだったんだ・

今更ながら、自分の短い人生を思い返した。

別に恋愛経験無い事が辛いとか寂しいとか思った事無かったけれど・

きつと、いつも功介と一緒にいてくれたから、そんな事思わずに来
たのだろう。

いや、功介がいたから、あたしの周りにだれも近づかなかったのか
も・・・

「いや、今回の場合、誰かを好きになったと言う表面上の記憶は消
えてしまったけれど、記憶の隠しポケットにその思いが残っていて、
河川敷きへ行ったり、俺と会ったりしたことが引き金になって、そ
の気持ちを思い出したんじゃないのかな？」

「でもあたし、一度でも好きになった人の事、完全に忘れるなんて、
あり得ないと思うの」

「誰かを好きになった事もないのに、そんな事わかるのか？」

うつ、痛い所を突いてくる・・・

「でも、誰かを好きになるって、その人を特別な人だと思う事じゃない？それなのに、どんなに思い出そうと思っても、思い出せないって変だと思う！」

いったい何なのだ？！

この頭の中のモヤモヤしたものは？

まるで、その人の情報だけデータ削除してしまったように、該当する記憶データを見つけられない。

「もしかしたら、外部からの働きかけでその記憶だけ消されたのかも知れないよ」

意味深な笑いを含んだ表情でボソリと呟いた早瀬は、まっすぐに真琴を見ていた。

真琴はその眼差しに背中がゾクリとした。

早瀬君、本当に何が言いたいのか？何か知っているのか？

怪訝な表情で真琴は早瀬を見返した。

「なんてね。最近、小説で記憶を消された男の話を読んだから、ちょっと思いついたんだ」

早瀬はまた悪戯っぽい笑顔で、真琴を見ていた。

な、なんて奴！人が真剣に悩んでいると言つのに、冗談ばかり・・・
真琴は思いつき早瀬を睨んだ。

早瀬はビール瓶を持つと、真琴のグラスにビールを注ぎ足しながら、そつと言った。

「真琴さん、冗談はさておき、今度その河川敷きへ俺と一緒に行って見たら何か思い出すんじゃないかな？」

真琴はぬるくなったビールの上に継ぎ足された泡の多いビールに、少しうんざりしながらも口に含むと、その苦さを消すために目の前にあつた焼き鳥の串に手を伸ばした。

しばらく、モグモグと口を動かしながら、早瀬の言つた事について考えていた。

早瀬君と一緒にあの河川敷へ行く・・・それで思い出せるのだろうか？

それより、そこまでして思い出したいのかな？自分は・・・確かにこのままでは、落ち着かないよね。

でも、思い出したとして、何があると言うのだろうか？

早瀬君も自分に似ていると言つ事が気になるんだろうな。

そうだよ、早くはつきりさせてスッキリしたいよね。

真琴はそう決心すると、隣でのんびりビールとつまみを食べている早瀬を見上げて言つた。

「早瀬君、一度一緒に行つてくれる？河川敷まで」

「ん？ああ、いいよ。いつでもいいから、都合のいい時に連絡してくれる？」

「うん。できたら、夕日の沈む頃がいいんだ。5時半頃は、いつが都合いいの？」

「木曜日ならなんとかなるかもしれないな。」

「わかった。また連絡するね。」

そう言うと、お互いの携帯ナンバーとアドレスを赤外線で交換した。

#04：理解不能の心のモヤモヤ

「真琴」

ふいに名前を呼ばれて、声のする方を見ると、七海と美浪が手を振って駆けて来た。

コンパもどきの飲み会の後、10日程過ぎた4月の終わり、突然の休講でぽっかり空いた時間を持て余して、文学部棟横の木陰のベンチで真琴は、ボーと座っていた。

膝の上には図書館で借りた記憶に関する脳科学の本。右手にカルピスウォーターのペットボトル。

「真琴、何度もメールと電話したのに・・・」

七海が近付いて真琴の前に腰に手をあてて仁王立ちし、睨んでいる。

「え？携帯？」

慌てて鞆の中を探り、携帯を取り出した。

「あ、電池切れ・・・ごめん。」

「まあちゃんと切れる前に充電してよね」

「それで、何だったの？」

あ、そうそう・・・と言いながら、七海は美浪の方を振り向くとアイコンタクトで頷き合い、二人して真琴の横に座り込んだ。

「ねえ、真琴。真琴と功介君って付き合ってるとかじゃないよね？」

「はあ？何言ってるの？幼馴染の腐れ縁って言うてるでしょ、いつも。」

「じゃあさ、功介君って、今付き合ってる人いるの？」

「何？七海。あんたまさか、功介の事好きになったとか？」

真琴は訝し気な目で七海を見つめながら言った。そんな真琴の視線と言葉を受けた七海は、慌ててブンブンと首を振った。

「ちがう。美浪よ、美浪が功介君に惚れちゃったんだって」

七海の隣で俯いて顔を赤らめている美浪は、守ってあげたいような可愛らしさだ。

「え？ホント？美浪。あんな口の悪い奴、本気で好きなの？」

「うん。この間、功介君とっても優しくかったし、私が緊張してるのがわかって、いろんな楽しい話をしてリラックスさせてくれたの。男の人とあんなに話せたのは初めてなの。」

「わかった。功介に彼女がいるか、聞いておくね。それで、美浪の事、売り込んでおくよ。」

真琴はそう言いながら、高校の時に功介の事を好きな後輩の女の子の恋を一生懸命応援した事を思い出した。あれぞ、青春って奴だったよな……

その週の週末、真琴はあの居酒屋で功介と向かい合った。
「お疲れ」とまずビールで乾杯して、当たり前障りの会話から始めた。

「ん？それで何？何か話があるんだろ？」

いきなり本題に入るのもためらわれて、たわいもないバカ話をしていたら、勘のいい功介は、直球で探りを入れて来た。

「あ、わかった？」とえへへと頭をかいていると

「あたりまえだろ。何年幼馴染してると思ってるんだ。おまえの方から誘って来る時は、何か困った時か、お願いがある時だろ？で、今度は何？」

・・・あー、さすがだ。功介は頭がいいなと、能天気な頭で真琴が考えていると、

「勉強の事か？レポートかなんかか？」とたたみかけて来た。

「ち、違うの。あの功介って、今付き合ってる人、いるの？」

「はあ？なんだよ、それ？」

「だから、今彼女がいるのか？って聞いているの。」

「なんでお前にそんな事言わなきゃなんないんだよ。」

「いいじゃん、教えてくれたって。」

功介は大げさにため息をついて、しげしげと真琴を見た。

「なんで、そんな事聞くんだ？そんな事のために呼んだのか？」

「あ、あのね、友達が功介の事、好きになっちゃったんだって。それで、彼女がいるのかどうか、聞かれたのよ。だから・・・」

「え〜。友達って、この間一緒に飲んだ子か？」

「うん。美浪って言う子、覚えてる？」

「3人しかいなかったから、忘れるはずないよ。そのうち一人はお前だし・・・美浪ちゃんか・・・あの子、可愛かったよな？お前とは違って、恥ずかしそうで、大人しい子だったし・・・」

「悪うございましたね。あたしは、ずーずーしくて、騒がしいですよー」

自分の事わかってんだ・・・と呟いて、功介がクスツと笑った。

「美浪ちゃんか・・・俺今フリーだし、付きあおっかな」

「え？功介も美浪の事、気になってたの？」

「なんだよ、お前。美浪ちゃんと付き合うよう勧めに来たんじゃないのか？」

「そ、そうだけど・・・気も無いのに付き合うのは、美浪に失礼じゃないかな？もしかして・・・体が目当てとか・・・」

「ば、ばか。何言ってるんだよ。付き合ってみなきゃ、好きになれる

かどうかも分かんないだろ。1回逢っただけの相手だし。まあ、嫌な感じは無かったからさ、付き合ってもいいかな。」

功介のやけに乗り気な発言に、真琴は何とも言えないモヤモヤしたものを感じていた。

#05：幼馴染との決別（前書き）

登場人物のキャラが、微妙に（大幅に）違ってきているような気がします（汗）

「時かけ」ファンの皆様、どうぞ温かい気持ちで、見守ってやってください。

お願いします。

#05：幼馴染との決別

「で、おまえはどうなんだよ？」

訳の分からないモヤモヤ感を一生懸命心の中から追いやろうと、人考え込んでいた真琴に、功介が聞いた。

「へ？あたし？」

思ってもみなかった質問に、真琴は気の抜けた返事をする。

「誰か付き合ってる奴いるのか？」

「んな訳ないじゃん」

「即答だな」

真琴はへへと笑って、ビールを一口飲んだ。
うえゝにがい・・・ぬるくなったビールは頂けない。

「尾崎はどうなんだよ？」

「尾崎君ねえゝ。お誘いのメールが来てたけど、断った。」

「おまえ、あっさりしてんな」

「だって、誘いに乗ったら、気があるかと勘違いされちゃうじゃん。」

「おまえなあゝそんな事言っていると、一生彼氏できないぞ。」

心底呆れた顔をした功介は、ビールの追加を注文している。

「いいもん。こうして功介と飲みに行ったりできるし……」

「俺もいつまでもおまえの子守りできないの。もう、いつまでも子供じゃないんだからな。」

そう言いながら、新しく来た冷えたビールを自分でグラスについだ功介は、ゴクゴクと飲んでいる。真琴はそのど元の突起が飲み込むたびに動くのを眺めていた。

子守ってなによ……

でも、今まで幼馴染って言うだけで、功介に甘えていたのかも……功介は優しい。

でも、それは私にだけじゃない。

そうだよ、いつまでも幼馴染ってだけで、無条件に功介に甘えていい訳じゃない。

もう子供じゃないんだし、いつまでも子供のままでいられないんだから……

そう思いながらも、年齢を重ねるたびに、手放すものが多い事に淋しさを感じていた。

時の流れと共にいろんな事が変わって行く。

それは、人と人とのつながりも同じなんだ。

「ところでさ、早瀬とはどうなんだよ。この間の飲み会の時、なんか変な雰囲気だったじゃないか？」

いきなり早瀬の話題を振られて、真琴はドキッとした。

早瀬君・・・

一緒に河川敷に行く約束をしたけれど、まだ連絡していない。思い出せない事を無理に思い出した方がいいのだろうか？

思い出せないのは思い出したいくないような出来事だと言う事じゃないのだろうか・・・

そんな事ばかり考えて、連絡する事が出来なかった。

「早瀬君って、功介も言ってたように、なんだか懐かしい感じがするのよね。それで、その話をしたただけだよ。」

一瞬、功介に早瀬君と話した内容や河川敷に行く話をしてみようかと思ったけれど、やっぱりやめた。自分自身がよく分かっていない事なのに、うまく話せる自信が無い。

「ふん」

功介は納得したのかどうか分からないけれど、それ以上早瀬君の話はしてこなかった。

何となく気まずい雰囲気になり落ち着かなくなった真琴は、もう一度美浪の話を振ってみた。

「ねえ、美浪の事、どうするの？」

「・・・」

功介は手に持ったビールグラスをじっと見つめて何か考え込んでいるようだった。

「功介？」

真琴がもう一度声をかけると、グラスに残ったビールを飲み干して、真琴の方を向いた。

「美浪ちゃんと付き合うよ。俺から誘えばいいんだろ？」
睨むように真琴を見た功介は、怒ったような声で言った。

「え？」

「だから、真琴は美浪ちゃんと俺に付き合って欲しいんだろ？」

功介のこの問いかけに、なぜだか素直にそうだと言えない気持ちに、真琴は戸惑った。

なぜだろ？

高校生の時みたいに、一生懸命友達のを応援できない……
自分から引き受けて、こうして功介と話していると言うのに……
功介は断ると思っていた？

付き合うなんて言うと思わなかった？
自分の心が分からない。

ただ、感じるのは、功介がこれ以上遠くへ行って欲しくないなって言う気持ちだけ。

でも、功介が美浪と付き合うと言う事は、もう二人でこんな風に飲みに行くのも遠慮しなくちゃいけないんだろうし、花火だって一緒に見に行けないってことだよな。

なんだか、淋しいな。

仕方のない事なんだけど……

功介は幼馴染であつて、私の彼じゃないんだもの……

そう考えた時、功介も一人の男だったと言う事に今更ながら気づいた。

今まで、ずーと傍にいて当たり前前の存在だと無意識に思いこんでいた。

この辺が潮時なのかもしれない。この優しい幼馴染に甘えるのも……
もう、大人なんだから……自立しなくちゃね。

「そうだよ。美浪、喜ぶよ。功介から誘つてやって。お願いね。私も、もう一度尾崎君に連絡してみようかな？」

「なんだよ、さっきは勘違いされると嫌だから断つたって言うてたくせに。」

そう言つて功介は真琴の腕を肘で突いた。

「へへ、功介に彼女できるのに、負けてられないじゃん。」

「なんだよ、そんな事で人の気持ち弄ぶなよ。」

「だって、付き合つてみなきゃ、好きになれるかどうかかわからないつて功介が言つたんだよ」

功介は自分の言つた事を思い出して、気まずい顔をした。

「そうだったな。あまり尾崎を傷つけないようにしてやってくれよ」

「それはお互い様。美浪を泣かしたら承知しないんだから。」

そんな風に言い合いをしながら、真琴は自分から尾崎に連絡する事はないだろうと思っていた。

そして、心の中でこの優しい幼馴染に今までありがとうと呟いた。

#01：懐かしい笑顔

いつの間にか夏になっていた。

梅雨のジメジメ感も、もうすぐ終わると梅雨の晴れ間の日差しが告げていた。

あれからしばらくして功介と美浪は付き合い始めた。

功介は思ったとおり、美浪をとて大切にしているようだ。

恥ずかしそうに頬を染めながら功介の話をする美浪を、真琴は優しい気持ちで見る事の出来ない自分に苛立った。

そう、この気持ちは子供が大事な玩具を取られたようなもの。

傍にいて当たり前だった功介の席がポツカリ空いて、少し淋しいだけ・・・

その内、他の事でその淋しさも埋まってしまうさ。

そんなある日、大学から帰ろうとしていたら、真琴は偶然早瀬と校門のところで出会った。

「あ、真琴さん。今帰り？」

「そうだけど・・・」

「だったら、以前言っていた河川敷きへ行かないか？俺、今からなら時間空いてるし。」

真琴は功介と美浪の事があったせいか、河川敷きへ行く事などすっかり失念していた。

いや、もうどうでもよくなってしまったのだった。

以前感じていた胸の痛みなんて、他の事と混じってよく分からなくなってしまうていた。

そんな時に、思いがけず現れた早瀬に、真琴は戸惑った。

真琴と早瀬は河川敷きの土手に座って、黙ったまま川の流れを見ていた。

以前ここに来ると感じていた胸の疼きも、今心の中を覆う何とも言えないモヤモヤした感情と一緒にして、川の流れに手放してしまえたら・・・

本当のところ、思い出せない思い出なんて、もうどうでもよかった。

「真琴さん、何かあったの？元氣ないけど・・・」

「え？」

早瀬の言葉に我に返った。真琴は隣にいる早瀬の存在さえ忘れるくらい、自分の世界にトリップしていたようだ。

「何か思い出せそう？」

「あっ・・・」

そうだよ。思い出すために一緒に来てくれたんだよね。

「ごめん・・・」

真琴はそう言いながら首を振った。

「そっか・・・あれから、ずいぶん時間経ったもんな・・・仕方な

いか。」

そう言つて、早瀬はまた遠くを見ていた。

そして、思い出したように真琴の方を見て話しかけた。

「そう言えば、功介つて美浪さんと付き合つてるんだね。」

ああ、大学の中でもよく一緒にいるから、みんな知ってるよね。ましてや、友達だし・・・

「うん、そうだよ。あたしがキューピットなんだ。」

真琴は苦笑いをして言った。

「キューピットの割には辛そうだよ?」

早瀬の見透かすような眼差しに、真琴は少し怯んだ。

「功介に先を越されて、悔しいだけだよ。」

「ふん、そう。」

なんだか、気まずいよ、この空気。早瀬君は一体何を言いたいの? いつも訳の分からない事ばかり言うんだから・・・

真琴は、小さく長い溜息を吐いた。

「この前さ、功介と尾崎と一緒に飲んだんだ。その時、功介が美浪さんを連れてきててね、付き合つてるって言つてたよ。尾崎の奴が、何で真琴さんを連れてこないんだって怒ったら、功介が、お前達は付き合つてないのか? って、反対に聞いてたよ。真琴さん、尾崎と付き合ってるの?」

ああ・・・

あたしが最後にあんな事を言ったから、功介は誤解してるんだ。あれから、尾崎君には連絡なんかしなかったのに・・・

「尾崎君とは付き合ってたないよ」

真琴はもう、どうでもよくなって、ボソリと呟いた。

「あのさ、真琴さん。君って、タイムトラベルとか、タイムリープとかって、興味ある？」

しばらく沈黙が続いた後、急に穏やかな笑顔になった早瀬が、突然全く違う話題を真琴に振ってきた。

え？何？いきなり・・・

ホント、早瀬君って、訳わかんない。

「それって、小説とか映画の話？」

キョトンとして聞き返す真琴の顔を見て、早瀬はクックと笑っている。

「まあ、そんなとこかな？」

「どちらかって言うと、興味あるかな？考古学って一種の過去へのタイムトラベルみたいなもんじゃない？」

真琴は、念願かなって村井教授の考古学のゼミに参加できるようになった。

「真琴さん、うまいこと言っな」

「へへ、そうかな？」

そんな言葉のやり取りだけで、真琴は気分がよくなっていた。

「真琴さん、もしも、俺が未来から来たって言ったら、信じる？」

そう言って真琴の方を見てニツコリ笑った早瀬の顔を、凝視した真琴は目をそらす事が出来なかった。

な、なに？

まったく、訳わかんない？

驚いた顔をした真琴が、情けない表情になった時、早瀬は思いっきり笑いだした。

早瀬の笑ったその顔は、ひどく懐かしいと頭の片隅で真琴は感じていた。

#02: ナイスの日(前書き)

「ナイスの日」……

「時かけ」ファンならご存知ですよね？

#02：ナイスの日

早瀬と河川敷きへ行った日から一週間ほどたった頃、真琴が大学から帰ると母親がニコニコと台所から出てきた。

「真琴、おかえり。とってもいい話があるのよ。」

上機嫌の母親は真琴にダイニングテーブルに着くよう促した。珍しく、お茶とお菓子まで用意して、母親も椅子に座る。

「あのね、魔女おばさんね、結婚するのよ。」

「へ？」

真琴は、まったく思いがけない話に、気の抜けた返事しかできなかった。

「だから、魔女おばさん、和ちゃんが結婚するんだって！」

「え、え〜？？魔女おばさん、お見合いでもしたの？」

「うふふ、それがね〜高校の頃と同級生と同窓会で再会して、それで、結婚する事になったらしいの。」

高校の時の同級生・・・

博物館の魔女おばさんの部屋の棚に飾ってあった写真。あの写真に写っていた人だろうか？

大人になる前にダメになったけど、必ず戻ってくると言っていた人？

「なんでもね、相手の人は高校出てからアメリカへ渡って、働きながら大学を出て、大手の会社に入ったらしいの。今回、日本支社長を命じられて、戻って来たらしいのよ。」

「その人は今まで結婚しなかったの？」

「よく知らないけど、そうじゃないの？同窓会で再会して、二人ともまだ独身だとわかって、すぐに結婚決めたらしいから・・・」

ん・・・そうなんだ。

やっぱり、魔女おばさんが言っていた、待つつもりなかったけど・・・
・と言う人なんだろうな。

魔女おばさん、よかったね。

真琴は、心の中でそう呟いて、ニツコリ笑った。

「お母さん、やけに詳しいのね。」

「そりゃーこんな嬉しい事ないじゃない？義姉さんも、嬉しくて我慢げにしゃべってたわよ。」

それは、あんたが根掘り葉掘り聞いたんでしょ？！と心の中で突っ込み入れながら、真琴は魔女おばさんがどんな風に両親に彼の事を話したのか、興味を持った。

明日、魔女おばさんの所へ行ってみよう。

あの、いつもひょうひょうとした掴みどころのない魔女おばさんが、どんな顔するか見たいもんだ。

そんな事を思いながら、目の前に用意された京月堂の生どら焼きに手を伸ばす。

この生どら好きなのよねーなどと思いながら、ガブリと大口開けてかぶりついた。

「明日、魔女おばさんそこへ行ってくるよ。お祝を言いに。」

「そう、だったらお祖母ちゃんがたくさんプラムを送ってくれたから、和ちゃんにもおすそ分け届けてくれる？」

「えー大学への帰りに寄ろうと思ったのに、プラムなんて持って講義に出れないよー」

「講義の間、ロッカーかどこかに置いておけないの？」

うーん。ゼミの研究室でも置かしてもらうか・・・

なんだか、生どら焼きで買収された気分だ。

結局、頼まれると嫌と言えない真琴は、母親の頼みを引き受ける事になった。

翌日、真琴は目覚めて寝ぼけ眼で時計を見て、驚いた。

ち、遅刻ー

あわてて飛び起き、適当に着替えると階段を駆け降りた。

「あら、おはよう。早いわね。」

母親が真琴を見て、能天気につづ。

は、早い？

「今日は2時限目からって言ってなかった？」

母親はそう言いながら、ご飯とみそ汁をよそってテーブルに置いた。

はぁーそうだった。

何で、遅刻なんて思っただらう？

きつとあの夢のせいだ。

夢の中で自分はまだ高校生だった。

功介ともう一人誰か男の子と野球の真似事みたいな事していた・・・

あの頃、功介と二人でキャッチボールはよくしてたけど・・・

後輩の女の子達と一緒に野球の真似事はした事あったけど・・・

功介以外の男子が混じった事ってあったっけ？

まあ、夢の話だもんね。

高校生だった夢を見たせいで、デジタル時計の数字が8時を過ぎて

いるのを見た時、遅刻なんて思ったんだ。まあ、寝ぼけてたって事だね。

真琴はそんな事考えながら、冷めた焼き鮭をつつく。

何気なく、つきっ放しになっているテレビを見ると「今日はナイスの日ですね」とキャスターの男性と、アシスタントの女性が話していた。

ナイスの日？

どこかで聞いたような・・・

#03：デジャブ？

今年の梅雨ももうすぐ終わりそうだ。

このところ、雨らしい雨が降っていない。自転車通学の真琴にはありがたい事だった。

3時限目の講義が終わると、研究室へプラムを取りに行つて、自転車に乗った。

校門の手前の並木道を通り過ぎようとした時、真琴は懐かしい声に呼び止められた。

「まこと」

振り返ると、並木道のベンチで功介が手を振っている。

功介の顔を見るのは、なんだかとても久しぶりで、その笑顔が真琴に今朝方見た高校生の時の功介を思い出させた。

「あ、功介、久しぶり」

「ああ」

真琴は功介の前まで戻り、笑顔を向けた。

「何してんの？こんなところで」

「美浪、待ってんだよ。さっき少し遅れるって電話あったから、おまえちよつと付き合えよ。」

功介はいつもの笑顔でそう言うと、ベンチの隣をポンポンと叩いた。

しかたないな　と言いながら、真琴は自転車を止めてベンチに座った。

「美浪とうまくいつてるみたいじゃん。」

「まあな。」

「あたしのお陰だよ。京月堂の生どら焼きでいいよ。」

「なんだ？それ。」

「だから、感謝の気持ちでしょう。よろしくね。」

真琴は、功介の方へ顔を向けると、ニツコリと笑った。

うん。大丈夫だ。

功介と今まで通りしゃべれる。

まだ心の中に少しモヤモヤしたものがあるけど、いつまでもこんな感情に振り回されないよ。

もう幼馴染から卒業したんだから・・・

「おまえ、尾崎と付き合いなかったのか？」

あーまだそんな事言ってるんだ。

「うん。あたしね、今、過去へのタイムトラベルに夢中だから、恋愛とか興味無いの。」

「過去へのタイムトラベル？」

「そつ、考古学って、過去へタイムトラベルするみたいでしょう？」

「ああ、村井ゼミに入れたんだってな。おまえ、似合わねえの」

「ふふ、意外性の女よ」

そのセリフがもつと似合わないよとボソリと言って、功介が笑ってる。

「じゃつ、あたし、もう行くね。魔女おばさんところへ行くんだ。そうそう、魔女おばさん結婚するんだって。」

小学生の頃から功介と魔女おばさんの勤める博物館へよく行って、功介も魔女おばさんはよく知っている。

「へ？魔女おばさんってまだ結婚してなかったんだ。あの人って、今いくつなんだ？」

「ん・・・38歳くらいかな？高校の時の同級生と同窓会で再会して、結婚するんだって。」

「へえーそんな事もあるんだ。俺からもおめでとつって言っておいて。」

わかったと言いながら、真琴は自転車に乗って手を振った。

自転車に乗って坂道の多い住宅街の中の商店街に差し掛かった時、ちょうど3時になった。

なんでわかったって？

下り坂の商店街の途中に大きなからくり時計がある。

その下を通り過ぎようとした時、からくり時計がオルゴール音と共に動きだしたから。

時計の針は3時を指していた。

この坂道を下った所に踏切がある。

これって、ちょっと危ないのよね。自転車で下って行くと、停まりきれずに踏切に突っ込みそうになるの。

そう思って、いつも、早い目からブレーキをかけて減速する。

そう、今日も下り坂に差し掛かった時にブレーキレバーに手をかけた。

ブレーキレバーを手前に引いているのに、減速されない。

え？どうして？ブレーキ壊れたの？

左右のブレーキレバーを同時に、一生懸命引くのに、自転車のブレーキは作動しない。

あれ？どうした？どうしよう？停まらないよー

真琴の自転車はどんどん加速し、一直線に踏切に向かって行く。

道行く人々は驚いて避けて行く。

みんな、退いて、退いて・・・

誰か、停めて、停めて、とめて～～

遮断機が非情な警報音を響き渡らせる。

目の先に見える、そこだけスローモーションのようにゆっくり下りる遮断機のバー。

加速する自転車はカンカンと鳴り響く踏切に突入するのを阻む遮断機のバーにぶつかって、跳ねあがった。

ゆっくりスローモーションのように体が自転車ごと持ち上がる。

加速の付いた自転車は真琴の体を乗せたまま、踏切の中に向かって、飛んで行く。

右側から迫る電車。

前かごに乗せたプラムが飛び出している。

前にもこんな事があつたような・・・

これは、デジャブ？

あたし・・・死ぬの？

こんな事なら、もう一度、功介に・・・

頭の中で流れる映像は、今朝見た高校生の頃の夢・・・

#04：時間が停止した世界（前書き）

少しご無沙汰してしまいました。

どうぞ、見捨てずに読んでくださったら嬉しいです。

#04：時間が停止した世界

「痛い」

気がつくとも商店街の下り坂の途中、真琴は何かにつかって自転車ごと倒れていた。

え？なに？さっき坂道を下らなかった？それに踏切に突っ込んだよ
うな・・・

ギャーも、もしかして、あたし、死んだの？

死んでも痛みって感じるの？

周りを見てみると、何かがおかしい。

周りの歩いているはずの人達が、止まっている。

商店街の中ほどに設置されたからくり時計も人形達が出てきたところ
で止まっている。

時計は3時を指している。

そう言えばさっきこのからくり時計の下を通った時、ちょうど3時
だったわけ。

下り坂の下の方を見ると、遮断機のバーが途中で止まっている。

そう、世界は、時間は…動きを止めていた。

なぜ？

「痛つてえなあ〜」

背後からそんな声が聞こえて、驚いて振り返ると、見覚えのある顔。

「は、早瀬君？」

真琴の言葉に反応したその人は、黙って真琴を見つめた。

「やっと現れましたね。」
そう言いながら二人に近付いてきたニヤツと笑ったその人は、第2の男？

世界は、時を止めていると言うのに、3人はお互いを見つめ合った。

え？今度は誰？

うん？またまた、早瀬君！！！！

「教授、何でこんなところにいるんだよ？！」

最初の男が次に現れた男に向かって叫んでいる。

教授と呼ばれたその男は、余裕の笑顔を浮かべている。

この二人は知り合いか？

よく似た顔の二人だったが、いつの間にか後から来た男の顔が、見知らぬ人の顔になっていた。

真琴は、何が起こっているのか、現状を把握できずに頭を振った。目を見開いて何度も瞬き、頬をつねってみた。

「痛っ！」

夢じゃないらしい・・・

そんな真琴の様子を見て、二人は笑いだした。

自分が笑われていると気づいた真琴は、二人を思い切り睨んだ。

「真琴さん、彼が誰か思い出しましたか？」

教授と呼ばれた後から来た男は、私の事を知っているらしいと真琴は思いつつ、最初の男の顔を見る。

早瀬君じゃないの？

あんまりじつと見つめたせいか、男は少し頬を染めて俯いた。そして、真琴は頭に浮かんだ名前を、そのまま口にした。

「ちあき・・・」

そう呼んだとたん、その男は嬉しそうに顔を上げた。

「真琴・・・」

彼に名前を呼ばれた時、頭の奥の封印が解かれた。じわじわと溶け出すように蘇る記憶。

頭の中は、朝方に見た夢の映像のもう一人いた男の子の顔が目の前の男の顔になって流れ出した。

「千昭、どうして、またここへ？」

真琴は真っ直ぐ千昭の顔を見て聞いた。

「おまえ、あのままだったら死んでいたんだぞ！」

千昭は焦った顔で言った。

「まあまあ、お二人さん、お話しは後で・・・場所を移動しましょう。」

教授と呼ばれた第二の男は、二人に向かって笑顔で穏やかに言った。

「あなたは、誰？」

真琴は傍にたたずむその第二の男を胡散臭そうに見上げた。

「私は、あなたが早瀬だと思っていた男ですよ。真琴さん。」

そう言ってニツコリ笑った。その笑顔はこれ以上質問する事を拒絶していた。

え？早瀬君？顔が違うんですが・・・

千昭は立ち上がると座り込んでいる真琴に向って「ほら」と手を出した。

真琴は千昭の手に引つ張ってもらって立ち上がった。真琴が立ちあがったのを確認すると、千昭は真琴の自転車を起こしている。

第二の男は、二人の様子を笑顔で見ながら、立ち上がったのを認めると、右手をあげて指をパチンと鳴らした。

そのとたん、世界は動きだした。時間と共に・・・

3時を告げるからくり時計のオルゴール音が何事もなかったかのよう流れ出す。

坂の下の踏切を、列車が今通り過ぎる。

世界は当たり前のように大昔からの時間が途切れる事など無いかのようになそこにあつた。

#05：三者会談（1）（前書き）

いつも、読んでくださって、ありがとうございます。

お話はほとんどSFぽくなって来たのですが、

タイムリープとかタイムトラベルとかに関して、

私の勝手な都合で書いていますので、

矛盾な点とかあると思います。

どうか、私の勝手な妄想と思って、

その辺は突っ込まずにスルーして頂けると嬉しいです。

さあ、前回突然現れた第二の男、教授とは何者なんでしょうか？

お楽しみくださいね。

#05：三者会談（1）

3人は雑踏を逃れるように、河川敷まで来ていた。黙ったまま二人の男が真琴を挟んで土手に座る。

真琴の頭の中はクエッションで飽和状態になっていた。

「教授、どうしてあんたがここに居るんだよ？」

千昭が教授を睨んで再び同じ質問をした。

しかし教授は千昭の質問には答えずただ笑っただけだった。

「くつくつく・・・それより、真琴さんは私がどうして早瀬なのか不思議でしょう？」

左隣にいる教授と呼ばれるその男は、30代後半から40代前半ぐらいの紳士。

どうして、同級生の早瀬君なんだ？

真琴は、自分に話を振られて思わず教授の方を向き、頷いた。

「私は、あなたや周りの人々に暗示をかけていたのですよ。千昭君の顔に見えるようにね。」

「どうして、そんな事する必要があるんだよ？」

真琴の右側から、千昭は教授を睨んで、また質問をぶつけた。

真琴も同じ疑問が湧いて、千昭と共に教授を見てウンウンと頷いた。

教授はふっと笑うと、千昭の方を見て、意味深な表情を向けた。

「千昭君、君の所為ですよ。」

教授は、悪戯っぽい眼をして千昭を見て答えた。

「はあゝ？何で俺の所為になるんだよ？」

「君がタイムパトロールの目を誤魔化して逃亡するから。」

千昭は痛い所を突かれて、ぐっと言葉に詰まった。

「でも、それと俺に化けるのとは関係無いだろ？」

千昭はとりあえず自分の非は棚に上げて、もう一度自分の疑問を教授にぶつける。

教授はとても楽しそうに笑うと、真琴の方を見て答えた。

「私は千昭君になって真琴さんに逢いたかったんですよ。」

そう言つて教授は真琴を見て、ニツコリと笑った。

真琴はその笑顔に訳も分からず怯んでしまった。

そして、おずおずと頭の中の一つのクエッションを教授に向かって呟いた。

「いったいあなたは何者なんですか？」

教授は大げさに驚いた顔をした。千昭はさつきからずーと教授を睨んだままだ。

「これは失礼しました。自己紹介がまだでしたね。

私は千昭君と同じ今より未来の時代で、ある研究所・・・

この時代の大学の研究室のようなところで 脳科学ハヤセトモキについて研究している早瀬智樹です。

千昭君も同じ研究所で、彼は自然科学の研究をしているんですよ。

まだまだヒヨッコですけどね。

彼のグループは地球の環境について研究しているんですが、その研究の一端で最初この時代に来たんです。といっても、彼にはほかの目的があつたみたいですけどね。

どうして高校生になつて・・・と思われると思いますが、彼はその年齢だったので、昼間からウロウロしていると目を付けられるでしょうし、目立たないためには集団の中に入ってしまうのが一番なんです。

しかし、彼が過去でこんな楽しい思い出を作っているなんて思わなかったですけどね。」

教授はクスツと笑って、意味ありげに千昭の顔を見た。

「な、なんだよ。ちゃんとデータは取って報告はしたんだから、いいだろ?」

千昭は、すこし頬を染めて、ぶっきらぼうに言った。

「あ、あの・・・それで、教授はどうしてあたしに逢いたいと思われたんですか?」

真琴は、話が別の方向へ行きそうだったので、口を挟んで流れを戻

した。

「あ、そうですね。千昭君は、タイムリープのルールを犯したため、3年間タイムリープ禁止になっていたんですが、

最初にこの時代に来た時自分に関する記憶を消してこなかった事がバレてね、

後始末をしに行く前に私の所に相談に来たんですよ。

記憶を消しても脳のどこかに記憶を残しておく事は出来ないのかとね。」

教授がここまで話したとたん、千昭は怒ったように口を挟んだ。

「そんな事は関係ないだろ？どうして真琴に逢いに行ったのか、聞いてるんだろ？」

教授は相変わらず楽しそうに千昭の様子を見つめながら、話を続けた。

「まあ、焦らないで・・・この辺から話さないと、真琴さんには分からないだろう？」

もう、よく分からないんですが・・・と真琴は心の中でつぶやいていた。

#06：三者会談（2）（前書き）

更新が遅れてしまつてすいませんでした。

だんだんとSF要素が多くなってきました。

私の勝手な妄想ですので、辻褄の合わないところがありましても、スルーして頂ければ……と思います。

宜しくお願いします。

#06：三者会談（2）

「千昭君は真琴さんに記憶を消しても自分の事を覚えておいて欲しかったみたいですねえ」

教授は意地悪く、ニヤリと笑ってまた話し出した。

「それで、記憶の隠しポケットの話をしたんですよ。でも、その後どうなったか報告がありませんし、その内にタイムパトロールから、千昭君がタイムリープしたまま逃亡したと連絡がありましたねえ。」

「と、逃亡？」

真琴は、驚いて千昭の方を見た。

千昭は逃亡の話をされると、バツが悪いのか俯いて黙り込んでしまっていた。

「そう、逃亡です。本来、タイムリープはタイムパトロールによって管理され

、誰がどの時代のどの場所にいるか、タイムGPSで確認できるようになっていんです。

それは、私の時代に生まれたものなら、受信機が無くても、

その人のいる時代・位置が感知できるんですが、

千昭君の場合、育ったのは私の時代でも、生まれたのはるか昔と言う特殊事例な訳で、

彼だけは特別受信機を携帯する事になっていたのですよ。

しかし、彼はその受信機を携帯せずにタイムリープしてしまったのです。

タイムパトロールもお手上げ状態でしてねえ。それで、私の所に協力要請がきましてね。

私は一応、千昭君の後見人と言う事になっているのでね。」

真琴は、左隣にいる紳士が話す穏やかな優しい声とその内容のギャップに、現実のものと受け入れがたかった。

・・・これって、SF映画とか、SF小説の話？じゃないよね？

真琴は自分の頭の許容量を完全に超えている話に、只々啞然とするだけだった。

右隣にいる彼は気まずいのか、完全にそっぽを向いて黙り込んでいく。

教授は二人の様子を伺いながら、ちよつと難しすぎましたかねえと言いつつ、また話し始めた。

「とにかく、私が心当たりを探しに行く事にしましたのです。

千昭君の話と今までのタイムリープ歴から、千昭君は必ずもう一度真琴さんの所へ現れるだろうと予測してね。

どうせ行くなら、脳科学者として確かめたくてねえ。

真琴さんの記憶の隠しポケットには果たして千昭君の記憶が残っているのかどうか。」

「そ、それで、千昭の顔に化けてあたしに近づいたんですか？」

真琴は、やっと自分のわかる所に来て、勢いづいて質問した。

「そう言う事になりますねえ。千昭君のしゃべり方は難しかったですよ。俺なんて言い慣れていませんでしたし。」

そう言くと、教授は一人でクスクス笑いだした。

「なんだよ、喋り方って・・・俺は普通に喋ってるだろ？」

千昭は、自分の事を笑われたように、怒って言い返した。

「それにしても、真琴さんは思い出しそうで、思い出してくれなくてねえ。その内に、真琴さんの頭の中は別の事で一杯になってしまふし・・・やっぱり、千昭君は失敗したのかと、諦めモードだったんですよ。」

「別の事って・・・」そう言いかけて、真琴は思い当たったのか黙り込んだ。

「何だよ、別の事って？」

そんな真琴を見て、千昭が重ねて質問した。

「千昭君は気付いていたんじゃないですか？真琴さんの記憶のポケットに以前からしまわれている人の事を・・・」

教授にそう言われて、千昭はハツとした顔をして、唇を噛んで俯いた。

「本人は未だに気づいていないみたいですけどね。」

教授は独り言のように小さな声で呟いた。

そんな二人のやり取りが耳に届いていない真琴は、早瀬君に出逢ってから数カ月の事を思い出していた。

訳の分からない事ばかり早瀬君が言っていたのは、私の記憶を呼び起こすためだったんだ・・・

いろいろな事がパズルのピースがピタリとはまるように繋がりました。

そして、あたしが千昭の事を思い出したと言う事は、千昭は成功したと言う事？

あたしの脳に記憶を残す事に・・・

でも、千昭に関して思い出した事も、今いろいろな未来の話を聞かされている事も、これらの記憶はまた消されると言う事だね？

「真琴さん？」

教授に名を呼ばれて、真琴は一人自分の世界にトリップしていた事に気づいた。

「あの・・・教授はあたしに未来の話をしていらっしゃいますが、それはタイムリープのルール違反ではないのですか？」

教授は一瞬思いもよらない事を聞かれたようにキョトンとした。そして突然笑い出し、優しく答えた。

「私の場合は、タイムパトロールの協力のために来ている訳ですから、いいですよ。今話している記憶は消しますしね。ただ・・・千昭は、逃亡した上に先程真琴さんをタイムリープで助けたので、おそらく・・・」

そこまで話して、教授は横目で千昭をちらりと見ると、言い淀んだ。

「教授、わかってるよ。わかってて逃亡したんだから・・・タイム

リープ永久禁止になるんだろ？」

千昭は掌を握りしめて、覚悟したようにボソリと言った。

「タイムリープ永久禁止って・・・あたしを助けたから？」

真琴は慌てた。

私が列車衝突事故で死ぬところだったのを助けてくれたからなの？

「そうじゃないんだ。受信機を持たずにタイムリープしていた事の方が問題なんだ。」

千昭は自分の握りしめた手を見つめたまま、絞り出すように言った。

「真琴さん。千昭君がタイムリープ永久禁止になるのは、受信機を携帯せずに逃亡したからなんです。本当なら千昭君は、そのまま逃亡していれば、見つかる事はなかったでしょう。それが問題なんですよ。無許可のタイムトラベラーは認めるわけにはいきませんからね。」

教授はあたしを慰めるために言ってくれるけれど、真琴はあたしを助けたためにタイムパトロールに見つかってしまったんだ。

それで、もう二度とタイムリープが出来ないと言っただろうか？

でも、千昭は見つからなかったら、ズーと逃亡するつもりだったのだろうか？

自分の時代から逃げ出したかったの？

何のために？

真琴は、隣に座る千昭が知らない人のようでとても遠く感じた。

#07：消えたぬくもり（前書き）

更新が大変遅れてしまって、すいません。

だんだんと、『時かけ』ファンの皆様の想いからかけ離れていって
いるようで、

怖くなってきました。

どうぞ、怒らずに優しく見守っていただけたら……

本当に私の勝手な妄想ですいません>（――）<

#07：消えたぬくもり

川の向こうに太陽が傾きだした。
少しづつ夕日色に染まり出す風景、そして、千昭の横顔。

「真琴は何も心配しなくていいよ。俺の問題だから・・・」
千昭は遠くを見つめたまま、ポツリと言った。

その一言が真琴には、余計に千昭を遠い存在に感じさせた。

真琴が俯いたまま何も言えずにいと、それを了解と受け取ったのか、千昭がまた、ポツリポツリと話し出した。

右側に座る教授は川向うに傾きだした夕陽を眩しそうに目を細めて見つめ、黙ったままだ。

「俺みたいに、故郷の時代を持たない者にとって、
もう、どの時代に生きてもいいんじゃないかって思ってたんだ。
俺がどの時代に生きて死んだとしても、

俺と言う存在の痕跡がどの時間の流れの中にも残らないんだと、思
ったんだ。

タイムリープが禁止されていた3年間、そんな事ばかり考えていた。
俺の事を必要としてくれる、

俺が俺として生きられる時代はもうないんじゃないかって・・・
だったら、自分の好きな時代でひっそりと生きよう。歴史を妨げな
いように、

傍観者として生きて行こうって・・・

それで、受信機を持たずにタイムリープをした。」

「ま、待て、千昭君。君は勘違いしてるぞ。どうして、我々の時代が君を必要としていないって言いきれるんだ。

君は我々の時代に必要な人間なんだよ。

君は我々の時代の救世主になるんだよ。

そのため遠い過去から、未来の我々の時代に使わされたんだよ。」
教授は慌てて、真顔で突拍子もない事を言い出した。

・・・時代の救世主？

・・・過去から未来に使わされた？

・・・千昭が？

真琴は、教授の突然の言葉に、目を見開いて教授の顔を見た。さっきまでの穏やかな笑顔や悪戯っぽい笑顔は消えて、とても真面目な表情だ。

え？マジですか？

「ハ、ハ、ハ・・・教授、なに真顔で冗談言ってるんだ？」

突然笑い出した千昭が、教授を睨むように言う。

「千昭君、君も分かっているだろう？我々の時代の地球環境の酷さは。」

この時代にいと、余計に感じてしまうよ。

この目の前の川が存在さえ、我々の時代からすれば驚きでしかない。君の研究しているグループは、もう一度、自然あふれる地球に戻すために日夜研究してるんだろう？今後、君はそのグループの中心的位置になって行くだろう。

君も今回の事でわかっただろう？どんなに逃げようとしても、

この運命からは逃げられないのだと言う事を。」

教授のいたって真面目な声は、真琴にとっては、どこかSF映画の誰かのセリフのようにしか聞こえなかったけれど、千昭にとっては、育った時代の環境を知っているだけに、否定しきれない物があるようだった。

「千昭・・・」

千昭の怒ったような、情けないような、あいまいな表情を見て、思わず真琴は名前を呼んだ。

そして、そのまま暫く考え込んでいた千昭は、少し落ち着いた表情になって教授の方を見た。

「教授、しばらくの間、真琴と二人にしてもらえませんか？逃げませんから。」

「・・・わかった。それじゃあ、これだけは持っていてくれ。」

教授はそう言うと、ポケットから小さく薄い丸い物を出した。それはタイムGPSの受信機だった。千昭はそれを受け取ると、手首にはめたリストバンドの内側にはめ込む。

その様子を見ていた教授は、また後でと言って姿を消した。

二人きりになっても、しばらくは黙ったまま川の方を見つめていた。

・・・いつたい千昭は何を考えているのだろうか？

・・・二人きりになって、私に何を言いたいのだろうか？

・・・いまさら・・・

記憶の中の千昭と今横にいる千昭とギャップがあり過ぎて、違う人
のようだ。

私が好きになった高校生の頃の千昭は、もう何処にもいないのだろ
うか？

あの頃のままずーと変わらないなんて、あり得ない事なのだろう。

千昭も功介も、そしてあたしも・・・

大人になって行くって、つまらないな・・・

そして、千昭は決心したように、真琴の方を向いた。

「真琴、驚いただろ？」

・・・当たり前じゃない！未来の話なんて小説か映画の中の話だよ。

「・・・」

「ごめんな。おまえにしたら未来の事なのに、巻き込んでしまって・・・」

「ねえ、千昭、全部嘘って事はないの？」

「嘘？」

「だから、未来の話もタイムリープも全部嘘じゃなの？」

「……………」

千昭は驚いた顔をしたものの、何も答えず黙り込んでしまった。

そして、一つため息をつくとき、千昭はポツリと言った。

「そうか……嘘だったらよかったのにな……始めから何もかも……」

「それって、どういう意味？」

真琴のそんな問いかけに、千昭はまた遠くに目を向けたまま口を閉ざした。

……何もかも嘘だったら……って、千昭と真琴との出逢いも嘘だと言う事にしたいの？

「なあ、真琴。功介は元気か？どうしてる？」

「功介？功介なら元気だよ。彼女できたし……」

「彼女？真琴が彼女じゃないのか？」

「違う、功介の彼女はあたしの友達だよ。あたしが仲を取り持ったの。」

「そうか……おまえはそれで良かったのか？」

「・・・もう、昔みたいに3人で楽しく過ごす事なんて、出来ないんだよね。」

あたしね、もう幼馴染から卒業したんだ。功介にも、いつまでも幼馴染の子守りは出来ないって言われたし・・・」

そう、変わって行くのが当りまえ・・・変わらないものなんて、無いのかも知れない。

時と共にすべての事が思い出へと姿を変え、その時の気持ちも忘れてゆくんだろうな。

「千昭・・・千昭もそうでしょ。また、あたしの前から姿を消したら、もう二度と逢えないんでしょう？」

ふたりの間の見えない川は、少しずつ深くなっていく。

「ごめん・・・」

「謝らないでよ・・・千昭は未来の地球を救うんですよ。救世主なんですよ。」

早く未来へ行きなさいよ。もう二度と思い出さないように、しっかりと記憶を消して行つてよね。」

真琴はそう言いながら、千昭の体を両手で押した。鼻の奥がツンと成って、今にもこぼれそうな涙を堪えながら・・・

その時、千昭の両手が真琴の体を包んだ。真琴が啞然としていると、しっかりと真琴の身体を抱きしめて肩に顔を埋めている千昭の肩は少し震えていた。

「真琴、ごめん・・・俺は真琴の事忘れないから・・・絶対忘れない」

いから・・・真琴、ありがとうな・・・」

ふいに体を包んでいた温もりが消えた。

#01：千昭の記憶（前書き）

更新が遅れていてすみません。

ぼつぼつとまた進めてまいりますので、よろしく願います。

#01：千昭の記憶

気がつくと、真琴は河川敷きの土手に座っていた。

自分がどうしてここにいるのか、しばらく思い出せずにいた。
ああ、そうだ。魔女おばさんの所へ行くところだったんだ。

太陽はまだ高い所にあった。

頬を流れる何かを感じて、手でぬぐってみると、涙だった。

涙？あたし、泣いてたの？なぜ？

自分が涙を流す理由が分からず、真琴は首をかしげた。

心の中は、自分でも訳のわからない、モヤモヤしたものが支配している。

でも、その正体も理由もわからず、しばらく考えていたけれど、答えが見つからないので考えるのをやめた。

まっ、いいか。

博物館の魔女おばさんの部屋のソファーに座り、真琴はまったりと紅茶の飲んでいた。

さつき、魔女おばさんに結婚のお祝いを言い、お祝いの品は何がいいかと言う話をしたばかりだ。

「それで、真琴の方はどうなの？最近、ここへは全然来てくれないし、ボランティアも辞めちゃったし・・・」

「あたしね、考古学のゼミに入ったの。」

「村井教授のところね。どう？面白いの？」

「考古学ってね、過去へのタイムトラベルのようで、面白いのよ。そう自分で言った言葉に、ふと、気づいて考え込んだ。」

・・・タイムトラベル・・・何か思い出しかけたような・・・

「千昭・・・」

ふいに浮かんだ名前を小さく口ずさむと、懐かしい笑顔が浮かんだ。

「ん？何か言った？」

「うっん。何でもないの。」

「そう、ところで、功介君は元気？」

「元気だよ。今日逢った時に、魔女おさんの結婚の話したら、おめでとうって言うておいてっさ。」

「そう、私からもありがとうって言うておいてね。真琴は功介君とは相変わらずなの？」

「あたしね、幼馴染から卒業したんだ。功介には彼女ができたんだ」

よ。あたしの友達でね、あたしは二人のキューピッドなんだ。」

魔女おばさんは、自分の椅子から立ち上がると、真琴の傍まで来て、あらためて真琴の顔をまじまじ見た。

「真琴は功介君が好きなんだと思っていた。」

「そんな事無いよ。功介が優しいから、甘えていたんだよね。功介にも幼馴染だからっていつまでも甘えるなって言われちゃったし。」

「ふん。それで自棄になっちゃった？」

「え？自棄にってどういう事？」

「ふふふ、何でも無い。」

まただ。魔女おばさんの訳の分からない会話。

「それより、魔女おばさんの旦那さんになる人って、前に話していた待つつもりはなかったって人？」

「ん・・・違うともいえるし、そうだとも言えるかな？」

もうまた訳の分からない返事・・・

「どういつ事？」

「もう一人、ずーと逢いたいと思っていた人がいるの。」

でも、二度と逢えない事、わかっていた。だから、待っていた訳じゃなかった。

今度結婚する彼も、必ず戻ると言っていたけど、待つつもりはなかった。

自分の気持ち自体がよく分からなかったから・・・」

「魔女おばさん・・・それって、結婚する人以外に好きな人がいたって事？」

「ん・・・そう言う訳じゃないんだけど・・・結婚する彼は、高校の3年間ずーと身近にすぎで、お互いの気持ちに気付かなかった。

もう一人の彼は、ほんの短い間しか一緒にいなかったけど、嵐のように心を揺さぶって去って行った。」

「なんだか、良く分からないよ。」

「真琴はお子ちゃまだからね。」

「何よ、それ。」

「今見えない事でも、時が経てば見えてくる事があるの。」

真琴にもその内わかる日が来るわよ。」

うーなんだか、うまく言いくるめられたような気がする。

真琴は、魔女おばさんの話を聞いて、余計訳が分からなくなってモヤモヤしたまま、帰路についた。

夏は夕方5時前でもまだ日が高い。グランドの横を通る時、子供達がキャッチボールをしていた。その様子に、自転車のブレーキをかけて片足をついたとたん、記憶がフラッシュバックして蘇った。

功介と千昭と三人でキャッチボールをしていた高校2年の夏。

思い出すと次々と記憶のかけらがこぼれ出し、一瞬目眩がした。

突然のあの頃のように名前を呼ばれた。

「真琴」

夢が現かと思っている内にもう一度呼ばれ振り返ると、笑顔の功介と美浪がいた。

「あ、功介、美浪。どうしたの？」

「どうしたって、こっちのセリフだよ。珍しい所にいるからさ。」

「高校生の頃、ここで功介や千昭とキャッチボールしたなあ　って
思い出してたんだ。」

真琴はグランドの方に顔を向けたまま、遠い目をして言った。

「ああ、そうだったな……って、千昭って誰だよ？」

「覚えてないの？……そっか、そうだよな。覚えてなくて当たり前か……」

「なんだよ？それ。キャッチボール一緒にしたって言うのは後輩の子たちぐらいだろ？そんな名前の子いたっけ？」

「ん・・・そんな気がただけ・・・いいじゃん、誰とでも。」

それまで、功介の隣で黙ったまま二人の会話を聞いていた美浪が、オズオズと声を出した。

「高校生なのにクラブじゃなくて、遊びでキャッチボールしてたの？」

美浪の疑問も最もだろう。女子高生が男子相手にキャッチボールなんて、普通はしないだろう。

ソフトボール部とか野球部ならいざ知らず、帰宅部のクセに今どきの高校生がなぜキャッチボール？と言う疑問が湧いて、当たり前だ。

「そう言えば、何でキャッチボールなんかする事になったんだったけ？」

そう、功介は覚えていない。だって、記憶を消されたのだから・・・さつきから、どんどん記憶がよみがえって来ている。

たしかあれは、千昭が言い出した事。

でも、言っただって、思い出す事はないのだから・・・

「どうしてだったかな？忘れちゃったよ。」

苦笑いしながら真琴は言った。

魔女おばさんからのありがとを伝えた後、じゃあと、グランドの前で右と左に別れた。

功介は美浪のアパートへ送って行くのだと言う。

ふたりの後ろ姿をもう一度振り返って見た時、もう戻らない夏を思

って切なくなつた。

#02：拒絶のオーラ（前書き）

お待たせしました。

どうぞよろしくお願いします。

#02：拒絶のオーラ

時の過ぎるのは早いもので、気がつけば大学も4年生になっていた。

それぞれが進路を考える時、真琴は漠然と今のめり込んでいる考古学と言う学問をもう少し続けたいと思っていた。

七海と美浪は就活真つただ中だ。

女子学生にとって、今の景気はすこぶるよろしくない。

地元出身の七海は地元民間企業の数社に的を絞って、就職活動を始めている。

地方出身の美浪の方は深刻だ。大学のあるこの地域で就職するのか、地元へ帰って就職するのか・・・

美浪の両親は帰っておいでと言っているらしいが、彼女を思い留まらせているのは、功介の存在だ。

功介は医学部なので後2年は大学があり、医師資格を取った後、2年間の研修がある。一人前の医者への道ははるかに遠い。

「それで、功介は美浪の就職について何も言ってくれないの？」

真琴は落ち込んでいる美浪を励まそうと、七海と共に大学近くのカフェでスイーツを食べようと誘った。

落ち込んでいる時は甘いものに限る・・・

「ん・・・お前の一生の仕事なんだから、自分でよく考えて決める・・・としか言わないの。」

美浪は大好きなストロベリータルトを前にして、手もつけずに俯いたまま小さな声で答えた。

「功介君は美浪の事、どう考えているんだろうね？美浪が実家の方へ帰るなんて思いもしないのかな？」

七海は、目の前のチョコレートパフェのクリームを少しずつすくって、口に運びながら言った。その顔は、チョコレートクリームの苦みのかかった甘さにうっとりとしている。

「それで、美浪はどうしたいの？実家へ帰るより、功介の傍で就職しようと考えているの？」

真琴が落ち着いた口調で聞くと、横から七海が口を挟んだ。

「そんなの当たり前でしょう？！誰だって遠距離恋愛は嫌だもの。ねっ、美浪、功介君から離れたくないでしょ？」

「うん・・・でも、功介はそう思っているのかな？」

美浪はさっきよりも小さな声で、ぼそぼそと呟いた。

「え？それってどういう事？」

クリームのつたスプーンを口に運ぶのを止めて、七海は驚いて聞き返した。

「美浪、もしかして功介とうまくいっていないの？」

真琴も七海に続いて驚いて聞いた。

いつも大人しい美浪だけれど、こんなに落ち込んだ雰囲気は初めてだ。

キャンパスでも時々一緒にいるのを見かけたし、美浪の嬉しそうに話すのを聞いていたので、二人はうまくいっているものと思っていた。

「本当は去年の秋の就活が始まった頃から、あまり会ってないの。大学の学食で時々一緒に食事するくらいで・・・功介は俺の事より今は就活を頑張ってる・・・」

それに、功介も勉強の方が忙しいみたいで・・・功介は私のどうして欲しいって絶対言わないの。

いつも、美浪はどうしたいんだ？って聞いてくれて、出来るだけ私の希望に沿うようにしてくれるだけで・・・

でも、勉強の方が忙いって言われると、逢いたいって言えないし・・・

功介は私の事どう思ってるのか、よく分からないの。」

美浪は俯いたまま半分泣いているような声で、今まで心の中にため込んでいたものを吐き出した。

こんな気持ちを隠して、幸せそうな顔していたのだろうか？

「わかった。あんたたち二人のキューピッドである真琴さんが、一肌脱いであげようじゃないの！」

真琴がそう言ったとたん、美浪は驚いた顔をして真琴の顔を見た。

そして、美浪の顔を見てそつと笑うと、真琴はもう一言付け加えた。

「乗り掛かった船だもの、功介の奴、問い詰めてやる！！」

意気込んだ真琴を見てオロオロしている美浪を諭すように、七海は美浪の肩に手を置いた。

「真琴に任せときなよ。功介君と付き合えるようになったのも、真琴のお蔭なんだから。」

どこか困ったような情けないような顔をした美浪は、戸惑いながらも頷いた。

数日後、いつもの居酒屋で真琴は功介と向かい合っていた。

「忙しそうだね。」

「ああ、レポートやプレゼンの準備やらいろいろとな。」

「ねえ、美浪に逢えないほど忙しいの？」

「あのなあ、あいつは今就活中で、忙しいのはあいつの方なの。」

「美浪はそんな事言っでなかったよ。功介が忙しそうだから、逢いたいって言えないんだって。」

「はあ……俺たちの事はどうだっていいだろ？それより、話っでなんだよ？」

そう、話があるからって、1年ぶりに功介を飲みに誘ったのだった。

「ねえ、美浪が実家へ帰って、向こうで就職しちゃっていいの？」

「なんだよ、また美浪の話しか？いい加減にしてくれよ。」

功介は心底ウザそうな顔をした。

真琴は功介からこれ以上この話はするなオーラの出て一瞬怯みかけたが、

「功介を問い詰めてやる！」と美浪に約束した手前、怯んでなどいられないのだ。

「功介、私言っただね。美浪を泣かすような事があつたら、許さないって。」

今の美浪を見ると、本当に落ち込んで、慰めようもないんだよ。両親には帰って来いって言われてるし、功介には自分で決めろって言われて突き放されるし、

美浪の気持ちには功介の傍にいたいって言う乙女心わかんないかなあ？」

真琴が功介の顔を覗き込むように見ると、功介は大げさにため息を吐いた。

「真琴もどうしてそんなに人の恋愛に首突っ込むかなあゝ自分の事は棚に上げて。」

「あたしの事は今は関係ないでしょ。それより、ちゃんと美浪と向き合って、これからの事真面目に話をしなきゃダメだよ。」

「……」

「美浪は、功介が自分の事どう思ってるかわからないって言ったよ。」

「……俺自身も良く分らないんだ。」

功介はどこか焦点の合わないような目線を手に持ったグラスに注ぎながら、ポツリと言った。

「わからないって……？」

「……美浪と付き合い合って決めたのは俺自身だから、美浪の事は大切にしてきたつもりだよ。」

でも、美浪の進路に要望を出せるだけの思いがあるかと問われたら今は何も言えないんだ。

美浪とのこれからに責任を持つ自信も無い。俺はまだまだ学生な訳だし……

医者として一人前になるまでにはまだまだずっと先だしな。」

功介のきつぱりとした物言いに驚きながらも、真琴は功介の顔をまじまじと見た。

どういう事？美浪の事、好きで付き合い合ってきたのじゃないの？恋人

なんですよ？

真琴の頭の中はいろいろな思いがぐるぐる渦を作るだけだった。

「もうこれ以上は何も言わないでくれ。」

最初は真琴に世話になったかもしれないけど、今はもう俺たちの問題なんだから、

真琴には関係ない。美浪とはちゃんと話をするから、美浪の話はこれでお終いにしてくれよ。」

功介は少し辛そうな顔をしながらも、今度こそはつきりとした拒絶のオーラを漂わせていた。

#03：優しい幼馴染

功介のいつにない真剣な表情に真琴はこれ以上は何も言えない事を悟った。

「わかったよ。もう何も言わない。ただ、美浪が納得するようによく話し合っただけだよ。」

真琴はそれだけ言うと、もう自分の役目は終わったとグラスに残ったビールを飲み干した。

そして、腰を上げようとしたとたん、功介に腕を掴まれた。

「ちょっと待てよ。俺の事ばかり散々責めて話聞いとして、自分の事はだんまりか？」

ちょっと、功介の目、怖いんですけど・・・

睨むように立ちあがりかけた真琴の顔を見上げた功介は逆襲に転じた。

「ゼミの先輩といい感じなんだって？」

「なっ・・・」

何の防御体制も出来ていなかった真琴は、返す言葉も用意できないまま、また椅子に座り込んだ。

「人の恋愛事には散々首突っ込むくせに、自分の事は秘密主義ですか？」

それでも幼馴染として心配してるんですよ、真琴さん。

悩みがあるなら相談にでも乗ってあげたいなあと…思っているんですよ。」

やけに丁寧な語り口で茶化して言う功介の口の端が少し釣り上った。

こんな風に切り返せるところなんかが功介は心の切り替えが早いんだなあと妙な関心をしてしまう。

「あたしの事なんて興味も無いくせに…もう、幼馴染の子守りはやめたんでしょ。」

「大事な幼馴染に興味無い事なんかないさ。

いつも心配してるよ。おまえは、後先考えずに行動する事が多いし、自分の事はボケっとして鈍感なくせに、人の事になると妙に一生懸命だし、

もうちょつと落ち着けてえの。ぜんぜん成長してないのな。」

「ほつといてよ。功介には迷惑かけてないでしょ。もう、甘えないようにしてるんだから。」

真琴はフンと顔を背けた。

何よ、いつも子供扱いして…私の事なんか、ほつといてよ！

すると、功介は優しい笑顔を真琴の方に向けて、ゆっくりと話し出した。

「なあ、真琴。おまえが勉強を教えて欲しいとか、何か相談に乗ってほしいとかって言って来ても、甘えてるとか迷惑だとか思った事無いよ。むしろ頼ってくれて嬉しいよ。」

俺たちは幼馴染だろ？前に子守りはやめたって言ったのは、俺がいるから誰かと付き合うつとかしないでいいって真琴が言うから、俺が側にいると真琴の出逢いを邪魔してるんじゃないかと思ったからなんだ。

いろんな奴と出逢って、いろんな奴と付き合って・・・付き合つと言っても恋愛だけじゃなくてさ・・・とにかく真琴の出逢いの幅を狭めてる気がして、ちよつと突き放した方がいいかなって思ってたんだ。」

真琴は功介の言葉に驚いて功介の方を見た。

・・・え？そんな風に思ってくれてたの？あたしのためだったの？

功介の優しさが今更ながら心に染みた。

そう、功介は昔からあたしをからかったり、叱ったりしながらも、優しくしてくれたよね。

そんな功介優しさに触れ、真琴の心も少しづつ落ち着き、素直な気持ちになって行った。

「ねえ、功介。高校生の頃って楽しかったよね。あの頃は将来の事なんてずーとずーと遙か彼方の事だったし、いつまでもあのまま居られるような気がしてた。あたしね、高校の時から好きな人がいたんだ。」

真琴の突然の告白に、功介は驚いた顔をした。

「え？俺の知ってる奴か？」

「知ってるけど、覚えてないと思う。短い間しかいなかったし、もう逢えないほど遠くへ行っちゃったしね。」

「ん？誰だ？それは・・・もう逢えない？外国へでも言ったのか？」

「地球上のどの場所よりも遠い所へ行ってしまったんだ。」

「もしかして・・・宇宙人？」

功介はニヤツと笑って言った。真琴もニヤツと笑って返し、言った。

「未来から来て未来へ帰って行った、未来人」

「そいつ、ターミネーターだろ？」

そう言っただけ功介はクツクと笑った。真琴はそんな功介を見て、少しムツとした。

「正真正銘の人間だよ。」

高校2年生の時、転校生としてやって来て、あたしたち二人と仲良くなっただけ、

彼がいた数カ月の間いつも3人で一緒にいたんだよ。

でも、あたしに未来から来た事がバレちゃったから、また未来へ帰って行った。

皆の記憶から彼の事を消して。」

「ふ〜ん。記憶を消したか・・・それなのに、なんでおまえは覚えてるんだ？」

功介は信じたのかどうかわからないけれど、真琴の話をそのまま聞いていてくれた。

「あたしには忘れて欲しくないって、思い出せるよう暗示をかけて行っただの。

それで、少しづつ思い出したって訳。」

「俺も一緒にいたのに、俺には暗示をかけてくれなかったのか・・・」

「未来から来た事知っているのはあたしだけだったからだと思う。」

「いいや、そいつも真琴の事、好きだったからだと思うよ。だから忘れて欲しくなかったんだよ。」

「・・・」

ありがと、功介。そんな風に言ってくれて・・・

功介の言葉に、千昭との別れの時に抱きしめられた温もりを思い出した。

ああ・・・それでも、彼は行ってしまった。

もう二度と会う事の出来ない所へ・・・

この辺でこの話はお終いにしないと、ますます落ち込んでしまいそ

うだった。

大丈夫・・・あたしは大丈夫だから・・・千昭、あたし、大丈夫だからね。

「ふふっ・・・功介、信じた？」

真琴は精一杯笑顔を作って功介を見た。

「なんだよ、いい話だったのに。真琴ちゃんでも乙女な妄想するんだと、感動してたのに・・・」

「なによ！乙女な妄想って！！」

「好きな人がいるなんて言うから、ドキッとしちゃったよ。」

「功介の事言ったんじゃないから！！悪かったわね。恋愛事に疎くて！！」

「誰もそんな事言ってないだろ？真琴はそのままでもいいんだよ。無理に背伸びしなくてもさ。」

功介は余裕の笑顔で、真琴を落ち着かせるために優しく諫めた。

功介の言葉は、蘇る千昭の記憶に押し潰されそうになっていた真琴の心に優しく沁み渡った。

#04：先輩と功介（前書き）

お待たせしてすみません。

ブログに連載している方が、なかなか進まないのので、こちらの更新も遅れてしまいました。
お楽しみ頂けたら嬉しいです。

#04：先輩と功介

もうすぐ梅雨も明けようかと言う7月半ば、前期期末試験も間近に控えた頃、梅雨とは思えない日差しに夏が始まっている事を感じながら、真琴は空いた2時限目にゼミの研究室の窓からぼんやりと外を眺めていた。

七海と美浪の就職活動も、なんとか内定に漕ぎ着けたようだ。七海は教育系の小さな出版社に落ち着いた。

美浪は結局両親に頼みこんで、こちらで就職する事に決めたようだった。地元へ帰っても、勉強してきた語学を生かせる仕事が無いと言う実情もあった。

美浪は、希望通りの外資系企業から内定を得ていた。

功介と美浪の間で、どのような話し合いが行われたのかは分からないけれど、真琴が功介に問い詰めたあの日からしばらくして、美浪が何か覚悟を決めたような顔をして話してくれた。

「私がこちらで就職するって功介に言ったら、美浪がそう決めたんだったら、応援するよって言ってくれたの。これから先の事は今は何も約束できないけど、今は傍にいてもいいって・・・言ってくれた。その今がいつまでも続くよう、頑張る。真琴、ありがとうね。」

これが功介の精一杯の誠意ある答えなのだろう。人の気持ちはどうする事も出来ないから、ただ、「よかったね」としか言えなかった。

後は美浪と功介の問題なのだから・・・

だんだんと遠い存在になって行く幼馴染のやさしい笑顔を思い出す。アイツの優しさや誠実さは昔から変わらないな・・・と苦笑いが込み上げた。

その時、ふと誰かの視線を感じた。なんだかじっと見られている熱い視線。

視線を感じる方にゆっくりと顔を向ける。

しかし、そこには誰の姿も無かった。

これと同じように視線を感じて振り返る事が今まで何度があった。

なんだか懐かしさを感じる視線・・・

その時、ふいに声をかけられた。

「真琴も来ていたんだ。」

考え事をしていたせい、そばまで近づく足音に全く気付かなかった真琴は、その声に驚いて振り返った。

そこには陽に焼けてニツコリ笑う、今は大学院生となった先輩、久遠^{うりよう}の姿があった。

「あ、久遠先輩、こんにちは。」

真琴も笑顔で返すと、久遠は「ああ」と笑顔のまま頷いた。

「あ、先輩。さっきここから出て行く人見かけませんでした？」

「いいや。誰かいたの？」

「うん。誰かの視線を感じたから、誰かいたのかなあ　と・・・」

「前にもそんな事言っただけだった？もしかして、ストーカーとか？」

「や、止めて下さいよ、先輩。怖いじゃないですか。」

「大丈夫だよ。その時は俺が守ってやるからさ。」

「まあ、先輩は冗談ばかり。」

ニツコリ笑っている先輩の背中を、真琴はバシンと叩きながら言った。

「いや、冗談じゃなくマジでストーカーかも知れないだろ。なるべく誰かと一緒にいるようにしろよ。俺も出来るだけ協力するからさ。」

あたしなんかストーカーする人なんていないよと真琴は思ったけれど、素直に「はい」と元気よく答えておいた。

「ところでさ、昼飯もう食べたか？」

「え？もうそんな時間？」

「どんなけばーっとしてたんだよ。その調子じゃ、まだみたいだな。なら、今から食べに行くぞ。」

久遠は有無を言わず、真琴の手首を掴むと学食へ向かって歩き出した。

学食は昼食を取るために集まった学生でこった返していた。

日替わりランチの乗ったトレーを持ったまま座る席をきよろきよろと探していると、誰かの呼ぶ声が聞こえた。

「おーい、真琴」

声のする方を見ると、笑顔で隣の空いた席を指さして手招きする功介と美浪の姿があった。

「久遠先輩、席ありました。」

そう言くと、真琴は久遠の前に立って歩き出した。

功介達の席に來ると、久遠と功介達を紹介をして、久遠は功介の隣、真琴は美浪の隣に座った。

「君が真琴の幼馴染君かい？」

久遠は目を細めて功介の目をまっすぐ見て言った。

「そうですけど、何か？」

功介も久遠に視線を合わせたまま、素っ気なく答える。

「いや、真琴から噂はかねがね・・・想像通りだよ。」

「どんな想像かわかりませんが・・・真琴、どんな噂してんだよ？！」

功介に軽く睨まれ、真琴は機嫌よく食べていた手を止めた。美浪も心配そうに真琴の顔を覗き込む。

「えー？功介は優しくていい奴だって、いつも言ってるよ。ねっ、

先輩。」

真琴はお願い光線を出して、久遠を見る。功介からは正直に言えばオーラが漂っている。

「そうだなあゝそんな事も言っていたっけ？」

久遠は意地悪だ。ニヤニヤ笑いながら、そう言っただけ。

「まあ先輩、惚けないでくださいよ」

功介の探るような視線から逃げるように笑いながら、真琴は軽く久遠を睨んだ。

「真琴、後で覚悟しておけよ。」

功介はそう言っただけと笑った。

その笑顔、魔王が降臨してるよ、功介・・・
真琴は、魔王功介に引きつった笑顔を返したのだった。

「それで、二人は付き合ってるの？」

久遠は、真琴より一足早く食べ終わり、功介と美浪に向かっていて、つてプライベートな突っ込みを入れている。

「ええ、まあ・・・」

功介のあいまいな返事の仕方に美浪が耐えるような表情で俯いた。

「ふうん、それで真琴は『幼馴染から卒業した』なんて言ってたんだ。」

「先輩、今そんな話しないでいいでしょ。」

真琴は口に食べ物を入れた状態で、もごもごと久遠に向けて抗議した。

「で、久遠さんと真琴は付き合ってるんですか？」

功介は横に座る久遠の方を向き、睨むような眼差しで聞き返す。

「真琴から何も聞いてない？」

ニヤツと笑って質問返しをする久遠。無表情のまま首を振る功介。

美浪はそんな二人をオロオロと見つめている。「ちよつと、先輩！」と口を挟もうとした真琴の存在は無視された。

「だったら、俺からは何も言えないな。」

久遠は意味深な笑いを浮かべたまま、シレつと答えた。

「ちよつと、先輩。誤解を与えるような言い方しないでください！」

真琴は完全に食べる手を止めて抗議する。

「真琴、ストーカー対策に俺と一緒にいる方がいいだろ？もう、幼馴染は頼れないんだから。」

「もお、何でそつちへ話が行くのよ。」

完全に食べる気を失くした真琴は、頬を赤くして久遠を睨んだ。

「真琴、ストーカーってなんだよ？」

功介は怒った顔して真琴を睨む。

「もおゝ先輩のせいで話がおかしな方へ行くじゃないですか。ストーカーなんていないよ。先輩が勝手に言ってるだけ。ついでに、先輩とも付き合ってるじゃない。」

「真琴ちゃん、つれないなあゝ。でも、最近誰かに見られてる気がするってよく言ってるじゃないか。」

「先輩、そんな言い方しても駄目ですよ。とにかく、ストーカーなんていないんだから！ほっておいてください、あたしの事は！」

頬を赤くして講義している真琴を嬉しそうに見ながら、久遠はクツクツと笑った。

「真琴は、すぐ本気で怒るから単純で可愛いよな。」

「先輩！いつもあたしをからかうの止めてください！！」

真琴と久遠の掛け合いを驚いて見ていた美浪が、くすつと笑いながら呟いた。

「真琴と先輩って仲いいんですね。」

久遠は、美浪に「そうだろ？」とウィンクする。美浪も久遠に笑顔を返している。

「あー美浪、勘違いしないでね。先輩とあたしは、先輩後輩の間以外の何者でもないんだからね！！」

そんなやり取りをぶすつとした表情で見ていた功介は、徐に立ち上がった。

「美浪、行くぞ。久遠さん、真琴、じゃあ」

二人分のトレーを重ね持って去っていく功介を、美浪が「真琴またね」と言って小走りで追いかける。

そんな二人の後姿を見送った真琴は、さっきまでの高揚した気持ちが一変に冷め、
大きなため息をついたのだった。

#05：花火大会に行かない訳（前書き）

すいません。

続けて更新するようなことを言っておきながら、
半月以上経ってしまいました。

お楽しみいただけたら、嬉しいです。

#05：花火大会に行かない訳

時は人々の憂いを抱えたまま、ゆつくりとそして着実に歩を進めていく。さつきまでこの手にあったと思っていた物が、次の瞬間には過去になり、何もない掌だけが残される。そんな空虚を胸に抱えつつ、真琴はまた熱い夏を迎えていた。

大学卒業後、同じ大学の大学院へ進んだ真琴と違い社会人となった二人の友人との交流も、忙しい彼女たちの都合がつかないまま、だんだんと疎遠になりつつあった。

真琴自身は同じ大学の同じ環境のなかで、友人たちのいない淋しさも研究に没頭する事で何となく紛らわしてきた。久遠先輩との距離感も相変わらずのまま、時は過ぎていく。

幼馴染の功介とも同じ大学にいるけれど、顔を合わす機会は以前よりも減った。ただ、彼を大学内で見かける時、以前なら必ずその横に友人の笑顔があったのに、当たり前なのだけど、今は無い。その事が最初の内は妙な違和感を感じたが、何となく心のなかでホッとしている自分に気付き、嫌な気分になった。

……なぜ？美浪のいない事であたしがホッとしているの？

それでも、大学内で功介に会うつと、今までと変わりなく接してくれる功介の態度に、いつの間にか慣れ、美浪が横にいない違和感も薄れて行った。

「真琴、今から昼飯か？」

梅雨が明け、前期試験目前の7月半ば、学食へ向かう途中、真琴は功介に声をかけられ振り向いた。そこには、相変わらぬ懐かし

い笑顔の幼馴染がいた。

功介に会うのは一カ月ぶりぐらいだろうか？一方的に見かけた事はあったけれど、声はかけなかった。

「そうだよ。功介は？」

功介の笑顔に誘われて、こちらも笑顔で返す。

「ああ、俺もまだ。一緒に行くか」

それは疑問形ではなく、決定事項のように呟いて、横に並んだ。並んで歩くこと自体、長い事なかったなと思いながら、そつと横を見上げる。

「功介ってこんなに背が高かったっけ？」

「おまえが縮んだんだろ」

「なによ、それ。縮む訳ないでしょ」

怒ったように言いながらも、功介のこうしたやり取りは、昔に帰ったみたいで嬉しかった。

昼食を終えて学食から出ようとした時、入口横の壁に8月にある花火大会のポスターが貼つてあるのに真琴は気づいた。

「そう言えば、もうすぐ花火大会なんだ……」

花火大会を思い出すと胸にチクリと痛みが走る。功介と美浪が付き合い始めたあの年から花火大会には行っていない。それまでは毎年当たり前のように功介と行っていたっけ……

「花火大会と言えば、真琴ちゃんは馬子にも衣装の浴衣を着てたっ

け……」

ニヤツと笑ってこちらを見る功介の顔、憎らしいんですけど……

「馬子にも衣装って……浴衣の真琴さんの色気に参りましたと言え
ば？」

「おまえのどこに色気があるんだよ」

「功介の目、節穴？余りの色気に世の男性を悩殺するといけないと
思っ、て、花火大会行くの止めてたのに」

「なんだよそれ？おまえに似合わない言葉ばつか並べやがって……
って、真琴、最近花火大会行って無かったのかよ？」

「うん。世の男性の事を思う優しい真琴さんですもの……」

「おまえ、調子に乗りすぎ！」

いきなりポカリと頭を叩かれ、真琴は功介を睨んだ。

「去年もその前も、おまえから誘いが無いから、誰かと行ったのか
と思っ、てたよ、花火大会」

「女友達は彼ができると薄情なんです。功介だっ、て彼女いるから、
一応遠慮したんだよ。わかる？真琴さんの想いやり」

「なんだよ、それ？美浪だっ、ておまえの友達だろ？言えばよかった
のに。真琴はお祭り好きなくせに。我慢しなくてもいいだろう？」

「あーこれだから。功介は女心わからな過ぎ！美浪が可愛そうじ
ゃん。それより、美浪とうまくいっ、てんでしょうね」

「……ああ、まあな。それより、今年の花火大会、行きたいなら一緒に行ってやってもいいぞ」

「遠慮しておきます。彼女とどうぞ。あたしも久遠先輩でも誘おうかな」
「悩殺浴衣でも着てさ」

二人で学食から外へ歩き出しながら、眩しい空を目を細めて見上げながら、真琴はつぶやくように言った。そんな真琴を功介が睨むように見ていたのを真琴は気付かなかった。

#06：プチ同窓会

「それでは久々の再会に、かんぱーい」

前期試験が終わり、夏休みに入った8月の最初の金曜日の夜、真琴は大学時代の友人、岩瀬七海と早川美浪に5カ月ぶりに居酒屋で再会した。

七海の元気な乾杯で再会を祝った3人は、さつそく目の前に並んだたくさんの料理をつつきながら、それぞれの近況を語り合った。

「それでね、先輩にすごく素敵な人がいてね」

目をトロンとさせた七海が上機嫌にしゃべっている。そんな七海と対照的に顔は笑みを浮かべてはいるのだが、どこか暗い影を漂わせている美浪に気付き、真琴は美浪の顔を覗き込んだ？

「美浪、どうしたの？仕事で疲れてるの？」

「うっん、大丈夫だよ。それより明日の夜は花火だね。真琴は行くの？」

「花火？うっん、今のところ予定ない」

「先輩とは行かないの？」

「別に誘われてないし……一人で行ってもね……美浪は功介と行くんでしょ？」

真琴は先日、功介と一緒に昼食を食べた後、花火のポスターを見つけた会話を思い返していた。

「うっん。会社の人と行くかもしれない……」

「え？どうして？功介とは行かないの？」

「忙しいんだって……」

そんな……この前は一緒に行けばいいのになって言ったのに……

「それで、会社の人と？」

「ねえ、ねえ、それは男の人でしょ？」

上機嫌の七海が口を挟んできた。

「そんな訳ないよね、美浪」

真琴は美浪が違う男の人と行くなんて信じられなくて、否定して欲しくて確認のように言ってみた。

「うん、そう。会社の男の先輩」

美浪は俯きがちに答える。

「まさか……二人きりじゃ無いよね？」

真琴はまだ信じたくなくて、すぐるように尋ねる。

「功介がいつって言ったんだ。会社の人に誘われてるって言ったら、俺は忙しくて行けないから、会社の人と行ってくればいいよって……」

そんな……

「でも、功介は一緒に行く人が男の人だとか、二人きりだとか知らないんじゃないの？」

「ちゃんと説つたよ。それでも、美浪が行きたいならいいよって……」

「それで美浪は会社のその男の人と行くつもりなの？その人、美浪だけを誘っているなら、美浪に氣があるんじゃないの？」

「分からない……どうしたいのか、その人が何を思っているか……」
美浪はそう説つと、テーブルに顔を伏せてしまった。

功介の奴、何を考へてるんだ！花火なんて1、2時間の事なのに、時間ぐらい作れるだろう。それに、いくら同じ会社の人でも、男の人と一緒に行くのを許すって、どういふ事？

「美浪はその会社の人と一緒に行きたい訳じゃないよね？功介の奴、何考へてるんだ。あたしが功介を問ひ詰めてやる！」
だんだんと怒りの感情が込み上げてきて、真琴はワナワナと震えた。

「真琴、もういいの。功介はきつと、もう私の事好きじゃないんだと思う。ううん。最初から本氣じゃなかったのかもしれない……真琴がお願いしてくれたから付き合ってくれただけ……」

頬に涙の後の残しながら、美浪は真琴を引き留める。そして、今まで心のどこかで思っていた氣持を吐きだしたのだった。

「何言っているの！そんな事でこんなに長く付き合わないって……」
辛そうな美浪を見て、真琴は慰めにもならない事を言いながら、功介に対する怒りを抑えられそうになかった。

#07：幼馴染との決裂

真琴は怒っていた。

その怒りのまま、花火当日のお昼過ぎ、功介に電話をした。

「あ、真琴、一緒に花火に行く気になったのか？」

功介のこの第一声が、真琴の怒りに油を注いだ。

「功介、忙しくて行けないんでしょう？どついう事？」

真琴の声は怒りのためぐつと低く響いた。

「えっ、……………もしかして、美浪に何か聞いたのか？」

「ええ、昨夜、美浪と七海と3人で飲みに行ったの」

「そうか……………」

功介は息を吐きだすと、一言そう返事した。

「功介、どついう事？美浪には一緒に行けないって言っただんでは？それに、会社の男の人に誘われたからって、一緒に行ってもいいなんて言っ……………」

「おまえには関係ないよ」

何それ？いつもそう言っ……………て逃げるんだから……………」

「あたしは最初に紹介したから責任があるのよ。美浪が泣いてるのにほ……………っておけないでしょう？」

「真琴、おまえなあ、これは俺と美浪の問題なんだよ。いつまでも首突っ込んでくるな！」

「だったら、美浪を泣かさないで！」

もう売り言葉に買い言葉のように、怒鳴り合っている。真琴の怒りは頂点に達しそうだった。しかし、その前に功介の方が爆発した。

「おまえ、何も知らないくせに、口ばっかはさむな！もうお前は関係ないんだよ。今後二度と美浪の事言うなよ！」

功介はそう怒鳴ると、たたき切るように電話を切った。

真琴は切れた電話に向かって「功介のバカ野郎！！！」と叫んだ。その声は家じゅうに響いた。そして、隣の部屋から「お姉ちゃん、うるさい！」と負けない大声で妹が叫び返した。

腹立つ、腹立つ、腹立つ！！！！

真琴は部屋のなかをぐるぐる回りながら、功介の奴どうしてくれようと悶々と考え込んだ。

昨夜の美浪の悲しそうな顔を思い出すと、また沸々と怒りが沸き起こり、もう、あんな奴、幼馴染でも何でもない、絶交だ！と心のなかで悪態をつく。

そしてベッドにはたりと倒れ込み、見慣れた天井を見つめる。

いったい功介は美浪の事どう思ってるのか？

今日だって花火に行こうと思えば行けたようだし……それなのに、他の男と行けなんて……美浪の気持ち分かっててそんな事言うかな

……

やっぱり功介は許せない！

本気で絶交してやる！

真琴は体を起こすと、右手で握り拳を作った。そして、その握り拳で頭のなかに思い描いた功介の顔面に、綺麗なストレートのパンチをお見舞いした。

功介との電話の後、イライラとしたまましばらく過ごしたが、課題のレポートを思い出し、机の前に座った。けれども、イライラは消えてくれず、結局ノートパソコンを前にしたまま、数時間を過ごしてしまった。気付くと日はもう傾きかけ、夕方になっていた。

「お母さん、美雪は？」

お腹が空いたなと2階から降りて台所へ入りながら、夕食を用意している母親に妹の美雪の所在を聞いた。妹は同じ大学の1年生になっていた。

「ん？美雪に用事？」

母親は料理の手を休めずに聞き返す。

「うん。貸したDVD返してもらおうと思って……」

真琴は友人から借りた今人気のアニメ映画のDVDを、レポートがあるからと先に妹に貸していたのだった。しかし、どうにもイライラしてレポートが進まないの、アニメでも見て気分転換をしようとして妹を探していたのだった。

「美雪なら、デートなんじゃない？花火見に行くって言っていたから……」

そうなのだ。美雪は大学へ入ってから彼ができた。妹のくせに生意気など、真琴は心の中で舌打ちする。

「真琴は花火見に行かないの？」

真琴が心の中で妹へ悪態をついていると、母親は料理の手を休める事なく、のんびりと地雷を踏んでくれた。

「行かない！」

真琴は、心の中にまだ功介への苛立ちを抱えていたため、思いのほか強い調子で答えてしまった。

そんな真琴の様子に驚いて料理の手を止めた母親は、真琴の様子をマジマジ見ながら、呆れたように死亡フラグを立てたのだった。

「どうしたの？ 功介君と喧嘩でもしたの？」

どうしてここで功介の名が出てくる。もう2年も一緒に行っていないのに……

真琴は穏やかに料理の手を再開した母親に向かって心の中で突っ込みを入れた。

「いつまでも功介と花火に行く訳じゃない！ それに、功介には彼女がいるし……」

真琴はここまで言いかけて、また怒りが沸々と湧きあがった。「もういい」と言い捨てると、そのまま2階へと駆け上がった。

#08：花火の夜

何よ、これじゃあたしって、情緒不安定な奴じゃん。

母さんが功介の名前なんか出すから！！

もとはと言えば功介の所為だし！

美雪もDVDもつと分かると事へ置いておきなさいよね！

真琴はベッドにふて寝しながら、心の中で周りのみんなに機関銃を撃つように突っ込みを入れた。

ああ、気分は最悪！

それでもお腹はすくらしい……何の遠慮もなくお腹がぐぐと空腹を告げた。

タイミング良く階下から「ご飯よ」と呼ぶ声。

さっき怒りをぶつけて逃げ出した気まずさがあつたけれど、そんなものより食欲の方が勝った。

お腹が膨れたので、今度こそレポートをと思っただけど、やる気が起こらない時って妙に周りのいろいろなものに気がかかる。いわゆる現実逃避って奴だ。

普段気にもしないぐしゃぐしゃになった本棚とか、いつも見て見ない振りして忘れてたオーディオやテレビの埃とか……

真琴は、もうしょうが無いなと思いつながら立ち上がると、いそいそと本棚の整理を始めてしまった。

この本棚に同じシリーズものの小説やコミックが綺麗に並ぶのは何力月ぶりの事が……

今までがあまりに酷かったせいで、綺麗になった本棚を見て、真琴は一人悦に入った。

その時不意に携帯が鳴った。それはメール着信を知らせるメロデ

イ。机の上の携帯を見ると、美浪からだった。その時、真琴の眉間にしわが寄るのを真琴自身気付きもしなかった。

From：美浪

To：真琴

Sub：昨夜はありがとう

真琴、昨夜はいろいろ話を聞いてくれてありがとう。

いつも心配ばかりかけて、本当にごめんね。

今日の花火、功介と行く事になりました。

真琴、功介に話してくれたのかな？

いつも、ありがとう。

じゃあ、またね。

読み終わると、真琴は大きく息を吐いた。

なによ。

何なのよ、二人とも。

自分の中で燻り続けている怒りのやり場を失くして、真琴は肩すかしをくらったかのようにだった。そして、足元から別な怒りが這い上がってくるのを、感じた。

『おまえには関係ない』

不意に功介の言葉が蘇った。

へーへー、金輪際関わりません。二人には！！

美浪が泣こうが、功介が悩もうが、私には関係ない。

もう聞かない。もう見ない。もう何も言わない！

お二人で仲良くしてればいいでしょ！！！！

もう一度、大きな溜息を吐くと、真琴は「わー！！！」と叫んだ。
今回はうるさいと叫ぶ美雪の声の代りに、ドーンと言う花火の音が響いてきた。

花火大会、始まったんだ……

夜空に咲き誇る巨大な花、お腹の底に鳴り響くような重い花火の音……

頭上でスパークする光の洪水の中、重低音に紛れて何でもいいから叫んでみたくなった。

『たまや』でも、『ばかやろう』でも、『うるさいー！』でもいいから、このやり場のない怒りを叫びに乘せて開放してしまいたい。

真琴は、何かに取りつかれたように家を飛び出すと、花火大会のある河川敷に向かって歩き出した。

闇に紛れて一人河川敷の土手に座る。この暗さなら知ってる奴に会ったって気付かれないだろう。

続けざまに上がる花火をぼんやりと眺めながら、さっき家を飛び出した時のやり場のない怒りが、いつの間にか情けないものに変わりつつあった。

叫び声どころか声さえ出さずただぼんやりと花火を見上げる。

そして、思い出していた、あの日、この場所で消えた千昭の事を

……

みんな離れていく。

みんな変わって行く。

私だけが、いつまでも昔の思い出にしがみついているようで、悲しかった。

私の中には、あの頃と変わらない想いがあるのに、どうして周りも同じと思っていたのだろうか？

上空できらめく花火のように、未来の事など何も考えずその瞬間が楽しくてしかたのなかったあの日々。

わかつているよ、永遠なんてない事。変わらないものなんて無い事。

そうやって一人、真琴は闇に紛れて上空のきらめきを、諦めにも似た感情でただぼんやりと眺めていた。

その時不意にいつものような視線を感じた。

やだ、本当にストーカー？

恐る恐るその視線の方を見た。丁度打ち上がった花火の光に照らされた懐かしい顔。高校生の時のような屈託のない千昭の笑顔がそこにあった。一瞬目が合い、見つめ合う。

千昭の視線にからめとられたように動けなくなった真琴を我に帰らせたのは、それまでと違う花火の音。最後のスターマインは、この夏最後の光の花を弾けさせている。

そして、一瞬花火の方に気を取られた真琴が、すぐに千昭がいた方に目を向けた時、もうその姿はどこにもなかった。

「なによ！傍にいるなら声ぐらいかけなさいよ！千昭のバカ野郎！
！！！！」

真琴の声は怒涛のように鳴り響くスターマインの音にかき消されていった。

#09：終わりと始まりと

#09：

あれは、千昭だった。
確かに千昭だった。

真琴は、さつき千昭がいた方を凝視したまま、花火の光に照らされた千昭の映像を脳内で何度もリピートさせていた。
と、言う事は、千昭はタイムリープ永久禁止にならなかったの？
それとも、千昭の事を思い出していた私の心が見せた、幻？

気付けば周りの人々は家路へと移動を始めていた。

花火は終わった。

功介と美浪は一緒に来ていたのだろうか？
どんな話をしたのだろうか？

………

もう、私には関係ない。

もう、永久に功介と花火を見に来る事はないだろう。
そう、千昭とだって……

その時初めて、心の真ん中に穴が開いたような喪失感を感じた。
そして、青春の扉が音もなく閉じて、もう二度と開か無い事に気が付いた……

あの花火の夜、真琴は青春の思い出を封印した。痛みにも似た青春の思い出にもう振りまわされなくなかったから……

あの夏の日から3年が過ぎた。

幼馴染と会いそんな学食へも、もう行かなかった。大学時代の友人とも何となくタイミングが合わないまま、あれから会っていない。

真琴は、大学院を卒業後、村井教授に誘われて助手として大学に残る事になった。好きな考古学の研究を続けられるのは嬉しかった。それに真琴にはライフワークと決めた事があった。

あの絵が描かれた時代、千昭の生まれた時代……その時代についての研究を仕事の合間にぼちぼちとしていこうと思っている。

彼のお父さんがその時代の何に魅せられて、その時代にタイムリープしたのか……

そして、あの絵が生まれた時代背景を知りたいと思ったのが、この研究をしようと思った始まりだった。

幼馴染の功介とは、あの夏から会っていない。同じ大学にいて言うのに、テリトリーが違っても会わないものなのかと、今更ながらその現実呆れてしまう。唯一、二人のテリトリーが重なっていた学食も、真琴が行かないともう接点すら無くなってしまった。

そして、真琴は学生の頃と変わらず、村井教授の研究室へ通い、一方、医学部を卒業して医師国家試験に合格した功介は、大学病院で研修をしていた。二人の距離は3年前と変わらないのに、もうどこか違う時代に生きている様な感覚さえしてしまう。

あれから、美浪からも何の連絡も無く、功介と美浪がどうなったかなんて、その興味の全てをあの夜にほおり出したまま、どこかに失くしてしまった。

3年前の秋、真琴は先輩の久遠から交際を申し込まれた。彼は考古学研究所に就職が決まり、大学院を卒業すると真琴に会えなくなるから付き合おうかと、いつもの軽い調子で言った。

「真琴は時々連れ出してやらないと、研究室に引きこもりになるだろう？だから、俺が連れ出してやるよ」

「そんなの大きな世話！」

真琴は久遠の押しつけがましいおせっかい発言に、憤慨して言い返した。

「くくくつ……真琴は変わらないなあ～出会った頃から」

「な、何よ。あたしだってもう大人なんだから、変わらない訳無いじゃない！」

「ほら、そんな風にむきになる所とか、さ」

「……」

みんな変わってしまったのに、あたしだけがまだあの頃に取り残されているのだろうか？

あたしの時間だけが、止まったままなのだろうか？

真琴は俯いてしばらく逡巡すると、決心したように顔を上げ、久遠の顔を睨むように真っ直ぐ見た。

「付き合う」

「えっ？」

久遠は真琴の突然の言葉に驚いた。冗談で言っただけでもりは無かったけれど、そんなにすんなり承諾するとは思わなかった。

「だから、先輩はあたしに交際を申し込んだんでしょ。OKだって言ってるの！」

「真琴……自棄になつて無いかな？」

久遠の問いかけに、真琴はまた睨み返した。

何よ、それ……

「今更冗談だなんて言わないでよ。真面目に返事したのに」

「冗談じゃないさ。本気も本気。真琴こそ、取り消し無しだぞ」

久遠は慌ててそう言つと、ニヤリと笑った。

真琴はその笑顔に少し怯んだが、「先輩こそ逃げないでよ！」と引きつった笑顔で返した。

そう、功介と付き合い始めてだんだんと綺麗になつていった美浪の様に、私も変われるんじゃないかって……ずーと功介や千昭と過ごした思い出に縛られて、見ようとしなかった幼い想いを忘れるためにも……年齢に見合った恋愛をする事が、変わる切っ掛けになるんじゃないかって……

真琴は、未知のステージへの階段を駆け上がって行つた。

#01：精神のバランス（前書き）

第4章のタイトルを変更して、今回から第5章：変わらないもの
としました。

予定していた通りに、なかなか話が進まなかったもので、新たに章を
増やす事にしました。

#01：精神のバランス

思い出すのは、あの日の夕日……

思い出すのは、3人で過ごした日々……

思い出すのは……入道雲の向こうに見えた未来……

年度末を迎える3月、三寒四温とはよく言ったもので、春は確実に近づきつつあった。河川敷の桜の木もつぼみが膨らみかけている。26歳の真琴は、春らしい暖かさの3月のある夕方、沈みゆく夕日を見つめながら河川敷の土手に座っていた。

いつも、無意識にここへ来てしまうのは、きっと心と体のバランスを取るためだと思う。

真琴は最近になって、自分の無意識の行動の理由を何となく理解し始めていた。

皆に置いて行かれたくなくて、無理に駆け上がった大人の階段。ただ、流されるままここまで来てしまったのに、心だけが付いて行かない。これじゃあいけないと、心の中で何度も警告が出るのに、立ち止るのも、戻るのも怖くて……ましてや全然別の道なんて、今の私には見えなくて……

ほろりと小さく息を吐いて、この土手から見えるいつもと同じ風景を、ゆっくりと左から右へと視線を動かして見ていく。

変わらない……

あの日と何も変わらない風景……ただ、季節が違っただけ……

いつも思う。なぜ、久遠先輩と付き合っているの？

久遠先輩の事は、嫌いじゃない。好きだと思う。……でも、その好きはどんな意味の好きなんだろう？

26歳にもなるのに、まだ恋の意味も分からない……

ただ、分かっているのは、もうあの頃には戻れないと言う事だけ

……

こうして、この場所に来て、26歳の私の精神のバランスを取らないと、今の自分について行けなくなる。あの一番輝いていた日々が、いつまでも続くと信じていた私は、いつの間にか身動きが取れなくなっていた。気がつけば皆いなくなっていた。ひとり皆に取り残された様な気になって、目の前に差し出された久遠先輩の手に縋り付いてしまった。そして、先輩に導かれるまま流されて、もう3年以上の日々が過ぎて行った。

今の私は本当の私なの？

もう、自分の事を「あたし」では無く「私」としか言えなくなつた。

私はいつたい、何を望んでいたのだろうか？

川向うに沈みゆく夕日に照らされて、真琴は意識を川面に漂わせたまま、遠くを見つめていた。近づく足音にも気付かないまま……隣に誰かが座った気配で、やっと我に返った。ゆっくりと隣りに座った人の方へ顔を向ける。

「功介！」

隣に座った功介も、こちらに顔を向けるとニツと笑った。

「久しぶりだな、真琴」

「ど、どうしてここへ？」

「真琴に話があったから、さ……」

「よく私がここにいる事わかったね？」

「よく見かけたよ、真琴がここにいるの……」

「え？ それなら、声をかけてくれたらよかったのに」

「周りを拒絶するシールドが見えたからさ……話しかけ辛かったんだよ」

「何、それ？ そんな事無いのに……じゃあ、今はどうして話しかけてるのよ？」

「もう、タイムリミットが近いから、どうしても話しておきたかったんだよ」

「え？ どういう事？」

「……それより、真琴はあのゼミの先輩と付き合ってるのか？」

え？

そんな事訊かれると思って無くて、また、功介の方へ顔を向けると功介の顔を見た。功介も同じように真琴の方へ顔を向けると、二人の目が合った。

「そ、そんな事……功介の方こそ、美浪とは続いているの？」

「おまえ、美浪に聞いてないのか？ 俺たちはあの3年前の花火の

日に別れたよ」

「え？そんな事……美浪も功介も何も言ってくれなかったじゃない？」

「まあ、別におまえに報告する必要も無いけどな。それより、話をはぐらかすなよ。お前の方こそどうなんだ？」

「ん……一応、付き合ってる事になるのかな？」

「何だよ、それ？」

「よく分からないんだ。自分の気持ちも先輩の気持ちも……やっぱ、私ってお子ちゃまなのかな？」

「自分で言うか？ いい年して、私は子供ですって、逃げ出すのか？」

「そう言う訳じゃないけど……付き合っってこと自体がよく分かって無いのかもしれない……」

「真琴……先輩とよく話し合った方がいいんじゃないか？ このままだとお互いに傷つけあうだけじゃないのか？」

真琴はもうこの話はお終いと言わんばかりに、口の端を少し上げて笑顔を作り、頷いた。そして、二人はしばらく何も言わず、川向うのビル群の向こうに半分以上沈んでしまった夕陽を見つめていた。

「真琴、俺……千昭に会ったよ」

#02：千昭の伝言（前書き）

長らくお待たせしました。
本当にすいませんでした。

あと少しで終わりなのに、ここにきて足踏み状態で、申し訳ないです。

どうぞ、お楽しみくださいね。

#02：千昭の伝言

「真琴、俺……千昭に会ったよ」

え？

一瞬、功介の言葉の意味が分からなかった。
千昭？

「え？ 千昭？ 思い出したの？ 千昭の事」

「ああ……どうして忘れていたんだろうな？」

あれから何年も経つけれど、やはり千昭はタイムリープして来ているんだと確信した真琴は、タイムリープを永久禁止にされなかった事への安堵と、近くに来ているのに自分の前に姿を現さない千昭が憎らしくなった。

「それで……千昭は何か言ってたの？」

「ああ、真琴の事を心配してたよ」

嘘！ 心配してるなら、顔を見せなさいよ！

もう、時間が経ちすぎて、最後に見た花火の日の千昭の顔さえ忘れそうだと怒りと悲しみがごちゃ混ぜになって真琴の心の中で渦巻く。

「そんな訳無いよ！ 私には全然会いに来ないもの」

「なんだかよく知らないけど、真琴にはもう会えないって言ってた

ぞ。だから、俺からよろしくつてさ……」

よろしくつて……バカにしてるの？

今ここで腹を立てても、功介には関係ないから……それより、功介はどこで千昭に会ったんだろう？

功介の記憶は消されていた筈……

どうして思い出したの？

「ねえ、千昭とどこで会ったの？」

「ここさ。この河川敷におまえがいる時、いつもおまえを遠くから
見ている奴がいたんだ。俺がおまえを見かけるようになってからだ
から、もう3年近くそいつも真琴を見てたかな？ そうしたら、一
か月前ぐらいに、ここで真琴を見かけてしばらく見ていたら、そい
つが話しかけてきたんだよ。そして、目があった途端に思い出した。
そいつが千昭だと言う事に。どうしてアイツの事、忘れてたのかな
？」

ええっ？ 3年も前から？ いいえ、もっと前から感じてた視線
は千昭だったんだ。

真琴は、千昭を忘れてしまった事に頭をひねっている功介の困惑
した顔を見て、思わず笑ってしまった。

二人とも、声もかけずに私を見てただなんて……

真琴は、3人で過ごした夏からもう何年も経っているのに、ずー
と気にかけてくれた二人の優しさを噛みしめた。

「なあに？ 二人ともぼけーとしてる私を見て笑ってたんでしょ？」
真琴が自虐的に切り返すと、功介は酷く真剣な顔をして首を振っ
た。

「千昭に言われたんだ。真琴を守ってくれって……真琴は苦しんでいるから救ってやってくれって……」

「なっ、何言ってるのよ？ 私は守ってもらわなくても、救ってもらわなくても大丈夫だから……それに、どうして千昭がそんな事、功介に頼むのよ？」

「訳が分からない……いったい千昭はどんな思惑があって功介の記憶を呼び起こして、そんな事を言うのか……」

「千昭は真琴の前には出れないから、俺に頼むって……なあ、おまえ千昭と何かあったのか？」

「えっ？ 私の前に出れない？ どういう事？」

「な、何にもないわよ。もう何年も会って無いのに……何か有るはずないでしょ！」

「探るような眼差しを向ける功介の言葉に、戸惑いを隠せず慌てる真琴は、強気な言葉しか返せない。」

「功介は千昭が未来から来た事知らないんだから……何も言えないよ。」

「それでも、真琴を見つめたまま逡巡する功介が、思わぬ言葉を発した。」

「真琴……高校生の頃、千昭に告られて、振ったんじゃないだろうな？ それで、千昭がおまえの前に出れないとか……？」

「そんな訳ないじゃん。千昭はずーと友達だったよ」

「真琴は記憶の中に閉じ込めた真実が、次第に大きくなる鼓動と共に溢れて来るようで俯いた。ふいに千昭の最後の抱擁を思い出す。頬に集まり始めた熱を抑えるすべもなく、真琴は俯いたまま唇を噛んで耐えるしかなかった。」

功介は、視線を川向うの夕日に照らされたビル群に置いて、千昭に言われた言葉の意味をもう一度考え直していた。その所為か、隣りで俯いて耐える真琴の様子に気づかずになっていた。

「千昭は……真琴が先輩と付き合っているのは間違った心だっって言ってたよ。俺もそう思ってた。おまえは先輩と付き合い始めた頃から、ここへ来る事多くなっただろ？　いつも溜息ついて、拒絶のシールドを張り巡らせていたおまえは、幸せな恋をしている様には見えなかった。だから、まだ先輩と付き合っていると思わなかったよ」

功介の口から語られる言葉は、驚く事ばかりだった。

間違った心って何？　どうして先輩と付き合い始めた時期を知ってる訳？　幸せな恋じゃ無いって……

真琴は心の中で功介の言った言葉にいちいち突っ込みを入れていた。

「ど、どうして、先輩と付き合い始めた頃を知ってるの？　さっき先輩と付き合ってるのかって訊いたじゃない！　付き合ってる事知ってたなら、訊く必要無いでしょ？！」

功介が自分の事をいろいろ知っている事に驚いた真琴は、その疑問をぶつけた。

「3年ぐらい前だろ？　先輩が俺に言いに来たんだよ」

え？　先輩が……？

真琴は呆けた顔を功介に向け、目でどうしてと問いかけた。

「学食にいた俺のところまで来て、報告して行っただよ。真琴と付き合う事になったから、邪魔するなって、なっ」

#03・使命と言つ名の翼（前書き）

長く、長くお待ちたせしてすみませんでした。
今回もお楽しみ頂けたら、嬉しいです。

#03：使命と言つ名の翼

先輩……

なぜ、功介に付き合うつて言いに行つたの？

なぜ邪魔するなつて……

真琴が先輩の取つた行動について考え込んでしまったのに責任を感じたのか、功介が慰めるように言つた。

「先輩も、真琴の事を大事に思つてたから、幼馴染の俺にわざわざ言いに来たんだろ？ まあ、邪魔するなつて言つのは余計だけど……それだけ真琴を独占したかつたんだろ？ 俺も真琴が幸せなら、それでいいと思つたし、邪魔する気も無かつたしな……真琴は先輩の事好きだから付き合い始めたんだろ？」

功介にそう言われて、真琴は3年前の事を思い返した。

あの時、私は……功介や美浪に追いつきたくて、目の前に差し出された手を握つた。先輩の事は嫌いじゃ無かつた。でも、本気で好きだつたのかと訊かれると自信が無い。

功介だつて、付き合つてみなきゃ、好きになれるかどうかも分からないと言つて、美浪と付き合い始めたくせに……

真琴は大きく溜息を吐いた。

今更あの頃の気持ちを思い出してみたところで、今が変わる訳でもない。とにかく今は、千昭や功介に心配されるような状態だと言ふ事だ。他人から見ても心配になる程、酷い状態だつたのか……3年も話していなかつた功介が声をかけて来るほどに……

「ねえ、千昭が功介に私を守ってくれとか、救ってくれとか頼んだつて言つたよね？ それで、功介は私に声をかけてきたの？」

真琴は功介の問いにしばらく逡巡した後、答えの代りに違う問いを返した。質問返しをされた功介は一瞬ムツとした顔をしたが、小さく息を吐いて真琴の問いに答え始めた。

「それもあるけど……最初に言っただろ？ もうタイムリミットだって……俺はもう物理的に真琴を守ってやる事も救ってやる事も出来なくなるんだ。だから、千昭に頼まれたけど……できそうにない。ただ、俺も千昭も真琴の事を心配しているって事を、覚えておいて欲しかったからさ……」

「物理的って……何？」

真琴は怪訝な顔をして功介に訊いた。功介は真琴の問いに顔を歪ませ、しばらく言い淀んで、そして決心したように口を開いた。

「真琴、俺……中東の最近内戦が終結した国へ行く事にしたんだ。NPOの活動で医師として行く。前から考えていた事なんだ。実家の病院の方は、弟もいるし、親父もまだまだやれるしな」

遠くを見つめながら話していた功介が、真琴の方を見てニコリと笑った。その笑顔は、全ての迷いを吹っ切って希望にあふれた笑顔だった。

「功介……」

真琴は何か言おうと思ったが、驚き過ぎて何も言葉が思いつかなかった。もう何年も功介と会う事も話す事も無かった。それでも、会おうと思えば合える距離にいると言う事が、幼馴染としての安心だった。

真琴は、動揺した。真琴の前には出られないと言う千昭。まだまだ不安定な危険地域の遠い異国へ行ってしまう功介。

「危険じゃないの？」

真琴がやつと言えたのはこんな言葉だった。

「危険は承知の上さ……でも、何かせずにはいられないんだ。活動に参加している先輩から話を聞いた時から、決めていたんだよ」

功介の真剣な表情を見て、真琴はもう何を言っても功介の決心は変わらない事を悟った。

ああ、そうか……

功介は、使命と言う名の翼を手に入れたんだ……

遠い異国の地へ飛んで行ける程の……

それは、私との物理的距離を遠く隔てるんだね……

千昭もそう、未来の地球を守ると言う使命感じて、必要としてくれる時代へ時の翼で飛んで行った。

それは……私との物理的時間を隔てた遠い未来。

私一人の小さな願いよりも、大勢の命のために羽ばたく二人が、あの頃の青い空の入道雲の先へ飛んで行くように見えた。

真琴は目を閉じて、脳裏に浮かんだ映像を追った。そして、何もかもを飲み込むと、功介の方を向いて少し笑った。

「そっか……功介は昔からボランティアとかしてたものね。……もしかして、そのために美浪と別れたんじゃないよね？」

ふいに浮かんだ疑問。美浪よりも、その使命を優先するの？

「ばーか。美浪とは3年前に別れたって言っただろ？……今だから言うけどさ、最後まで美浪の事、本気で好きになれなかったんだ。俺の事思ってくれる気持ちは痛いほどわかったけど、分かれば分かる程、本気になれない自分が辛くて、余計に会わないようにしていた事もあったよ。ごめん。真琴に心配ばかりかけてたのに……」

真琴は功介の話を聞いて、さっき考えていた自分の先輩への想いと同じだと思った。

功介も同じように苦しんでいたの？

「功介……私の方こそ、ごめん。私も、功介と同じ……先輩の事、本気で好きになれたらよかったんだけど……功介もこんな風に苦しんできたんだね……それなのにいつも責めて、本当にごめんね」

功介は一瞬目を見開いて真琴を見たけれど、すぐに優しい眼差しを彼女に向けて微笑んだ。

「俺も真琴も、バカだよな……相手を傷つけて、周りに心配かけて、自分も苦しんで……」

功介はそう言いながら、苦笑した。

「本当にバカだよな……」

そう呟いて、沈みゆく夕日に顔を向けた真琴の夕陽の光が映り込んだ目は、まるで泣きはらしたように赤く見えた。

美浪も功介のそんな気持ちに気付いていたんだ……

美浪に最後に会った3年前の花火大会の前日、彼女が言った言葉を真琴は思い出した。

『真琴、もういいの。功介はきつと、もう私の事好きじゃないんだと思う。ううん。最初から本気じゃなかったのかもしれない……真琴がお願いしてくれたから付き合ってくれただけ……』

美浪も辛かっただろうな……

もしかして、先輩も私のそんな気持ちに気付いてた？

天秤ばかりのバランスがとれるように、どちらも同じだけ相手の事を想っているなんて言うカップルは少ないのかもしれない。いつもどちらか一方の方が、少しだけ天秤ばかりは傾いているのかも知れない。

こんな状態で先輩と付き合ってもいいの？

真琴は自分の狡ささうに気付かないフリをしていた。

一人になるのが怖かった。

だから、先輩の手を離せずにいた……

でも、これ以上先輩を傷つけてもいいの？

「私ね、一人ぼっちになるのが怖かったの……」

チラリと功介の横顔を盗み見て、小さな声で告白する。

「誰だって、一人ぼっちは辛いさ……でも、だからと言って、相手の気持ちを利用して、自分の気持ち誤魔化すのは、お互い傷つけあうだけだろ？ もう、真琴は分かっているんだろ？ 後は先輩とよく話し合えよ」

功介はそれだけ言っていると、立ち上がった。真琴は功介の顔を見上げると、「わかった」と一言言った。

「じゃあな、真琴。もうここで溜息なんかついてるなよ。早くいつもの元気な真琴になれよ」

ニツと笑ってそう言っていると、功介は手を上げて踵を返し、ゆっくりと去って行った。

タイムリミットだと功介は言った。それは、今日話すのが最後だと言う事なんだと、今頃になって気付いた。「さよなら」も「気を付けて」も「元気でね」も言わなかった。どれも別れの言葉だから

……

又いつかどこかで、功介に会う日が来るのだろうか？

真琴は、夕日が完全に沈み、あたりが薄暗くなるまで、その場を離れられなかった。

#04：先輩との別れ（前書き）

随分御無沙汰してしまつて、すいませんでした。
久々の更新です。
クライマックス間近です。

#04：先輩との別れ

「真琴、結婚しないか？」

2ヶ月ぶりに会った恋人久遠の言葉に、真琴は戸惑いを隠せなかった。

3月のあの河川敷で功介に指摘された自分の気持ちを持て余したまま、真琴は自分から話すために会いに行く事がどうしてもできず、年度末や年度初めの忙しさが一段落した4月の下旬、久遠からの誘いようやく、恋人と対峙したのだった。

久遠の突然のプロポーズは、真琴の頭を真っ白にした。驚いて怯んだまま、絶句していると、久遠はクツクと笑いだした。

「なんだ？ そんなに驚く事か？ 適齢期の男女が付き合っていれば、結婚を考えてもおかしくないだろ？ それとも、真琴は遊びだった訳？」

久遠はニヤリと笑いながら、からかうように言う。しかし、今の真琴には、どう答えていいのか分からなかった。結局口から出たのはこんな言葉だった。

「ごめんなさい」

俯き加減の顔から上目づかいで久遠を見上げて、たった一言、絞り出すように謝罪の言葉を言うと、さっきまで揶揄うような笑顔を見せていた久遠も、日が陰る様にその表情を曇らせた。

「気付いたのか？」

「えっ？」

真琴は、久遠の問いかけの意味が分からなかった。

「自分の気持ちに、気付いたのか？」

「ええっ？ 何を言ってるの？」

真琴が怪訝な顔をして問い返すと、久遠は溜息を吐いた。

「残念。真琴は鈍感だから、一生自分の気持ちに気付かずに、流されると思ったのに……」

久遠はそんな事を言って、自嘲気味に笑った。

「なんですって？ 鈍感？ 流される？」

「遼さん、どう言う事ですか？ からかったんですか？」

「俺もざまーないな。3年も付き合ってきたのに、真琴の心の中からあいつを追い出せなかったんだから……こうなる事は、なんとなく予感してたけどな……」

久遠の自虐的な言葉に、真琴は益々眉間に皺を寄せた。

「本当に何を言ってるの？ あいつって……意味分かんない！」

真琴はイライラした。久遠の何でも分かっているとでも言いたげな口ぶりに、腹が立った。

「……自分の気持ちに気付いたのかですって？」

「……心の中からあいつを追い出せなかったですって！！」

「……あいつって誰よ？」

「……遼さんは、私がただ流されて付き合ってた来たと思ってるの！」

「ここまで考えて、真琴は先日の功介との会話を思い出した。」

『私ね、一人ぼっちになるのが怖かったの……』

『誰だって、一人ぼっちは辛いさ……でも、だからと言って、相手の気持ちを利用して、自分の気持ち誤魔化すのは、お互い傷つけあうだけだろ？』

私はバカだ……

みんな私の浅はかさに気付いていたんだ……

「俺さ、この間発表した論文が評価されて、以前から申請していた留学制度の許可がおりたんだ。それで、9月からイギリスへ留学する事になった」

「えっ？」

俯いてグルグル考えていた真琴に、久遠は突然爆弾の様な事実を告げた。

なに？ 遼さんも、遼さんまで、海の方こうへ行ってしまうの？

「配偶者は連れて行っていい事になっている。真琴は学生の頃からずーと同じ環境に居るから、いつまでもあいつの事忘れられないかもしれないって思ってさ、それなら、真琴が自分の気持ちに気付く前に環境を変えてしまえば、新たな気持ちも生まれるかなって思ったりしたんだ。やっと留学が認められたのに、間に合わなかったか……」

久遠は、自分の思惑を暴露して、自嘲的な笑いを漏らす。

「遼さん、今まで留学の話なんて、一言も言わなかったじゃない？」
一人自己完結したように納得している久遠に、真琴は腹が立った。

「どうしても留学がしたいという強い気持ちじゃ無かったんだ。さつきも言った様に、真琴を連れて環境を変えたかったからだよ。準備を整えてから、言いたかったんだ……」

遼さんの言葉に、罪悪感が胸の中に広がる。私は今まで遼さんの事を思つて、遼さんの為に何かしてあげただろうか？

ただ、彼が導いてくれる新しい世界を享受していただけだ……一人の淋しさを埋めるために……

「遼さん、ごめんなさい……」

もうこれ以上、彼の優しさに甘える訳にはいかないと、やっと自分の中の弱さに鞭を振るい、彼を自由にするために、真琴は謝罪の言葉を重ねた。

いつも余裕の表情をして、私を導いてくれた遼さんの顔が泣いている様に歪んだ。でも、その表情は一瞬で、すぐにいつものからかうような表情になった。

「真琴もバカだな。こんなにいい男の俺を振るんだから……だから、真琴は笑顔でいないと駄目だぞ。俺は真琴がいつも笑顔でいてくれたら、それでいいんだから……」

久遠はそう言うと、いつものにやりとした笑顔を見せて背を向けた。

その年の9月、久遠もまた遠い異国の地へと旅立つていった。真琴は、久遠に答える事ができなかった罪悪感と、一人の淋しさを紛らすように、仕事に没頭した。

こんな真琴を支えたのは、遠い異国の地に居る功介からのメールだった。一ヶ月に一度程度の頻度でやり取りされるメールは、地球

上を駆け巡り真琴の所へ届く。たったそれだけの事が、今の真琴には慰めになった。

繋がっている……

ずーと昔からつながっていた糸は、切れた訳じゃ無かった……

幼馴染との近況を伝え合うだけのメールでも、同じ時間に生きていると言う安心感があった。

未来の彼方に居るもう会う事のないアイツの顔が、一瞬よぎった。

功介は、内戦の悲惨さ、残された人々の悲しみ、そして、そんな中でさえ純真な子供達の笑顔に心動かされたと、メールに綴っていた。自分の無力を齒痒く思いながらも、頑張っている姿を、真琴は想像した。

功介の昔からブレの無い正義感にどこか懐かしさを感じながら、遠い異国の地へと意識を飛ばす。テレビで見た内戦のため瓦礫と化した街の様子を思い出した。そんな中で彼は活動しているのだろうか、少し心配になりながらも、希望に燃えたあの時の瞳を思い出して、真琴は一つ溜息を吐いた。

#05：幼馴染との再会

真琴が助手をしている村井教授の元に、内戦で貴重な歴史的文化遗产を壊滅状態にしてしまった彼の地の、考古遺産修復の依頼が飛び込んで来た。教授が得意としている時代の宗教的な石造で、歴史的に貴重な遺産の為、国際的なプロジェクトが組まれる事となり、教授もそのメンバーに抜擢されたのだった。

大学が夏休みに入る8月の初旬から調査のために、急遽真琴も教授の助手と言う事で同行して渡航する事になった。自分が行く事になって初めて、行き先が功介が活動している国だと、今更ながら付き、慌ててメールを送った真琴だった。

真琴からのメールを功介がいつ見るかも分からないまま出発したが、連絡を取る方法も分からず、結局、初めての事や慣れない異国、言葉や食べ物の違いなどに慣れるまで、真琴は功介にメールした事さえ忘れていた。

彼の地での活動が一ヶ月を過ぎた頃、真琴達が調査をしている現場に、突然功介が訪ねて来た。

一年半ぶりに見た功介は、日に焼け、頬が引き締まり、髭を生やしていたので、最初すぐには誰だか分からない程だった。教授に訳を話して時間を貰い、付近を案内する。

草も生えない荒涼とした砂と岩の地形。川の傍にわずかな草木が生え、集落ができていた。川を望む丘に二人で座り、この異国の地で功介と一緒に居る事の不思議を考えた。

「不思議だね」

しばらく沈黙の後、真琴がポツリと言った。

「え？」

功介は、いきなり発した真琴の言葉を、上手く聞き取れなかった。

「日本からさ、こんなに遠く離れた異国の地にいるのに、やっぱり功介と一緒に川を見下ろしてるなんて……不思議な気がする」

「ああ、そうだな。俺はもう一年半もこちらに居るから、なんとなくこの地も馴染んでしまった感じはあるけど……真琴がここに居るのは、不思議な気がするな……」

そう言いながら功介は遠い目をした。

こんな風にお互いの環境はどんどん変わり、否が応でも大人としての責任を求められる。もう子供のままではいられないんだと分かっていながら、この年になってもまだ何処か、あの頃の自分に戻りたくて、手放せずにいる記憶と想い。

「功介は馴染み過ぎて、現地の人みたいだよ」

そう言って、真琴は悪戯っぽく笑う。それでも功介の本質は何も変わっていないよと、心の中で呟いた。

功介がこの地へ旅立つ前、河川敷で何年振りかに会った時、それまで何年も、会う事も話をする事も無かった時期があったから、真琴はもう功介はあの頃の功介じゃないと思っていた。けれど、話し出すと、以前と変わらない幼馴染の功介がそこにいた。

「ふふん。現地の人の信頼を得るには、郷に入らずんば郷に従えだよ」

「えー？　なんかちょっと意味が違う気がするけど……」

「まあ、細かい事は気にするな。それより真琴、ちょっと痩せたんじゃないのか？」

「まあね。ここの食べ物や水に慣れるのに、ずいぶんかかったから……功介はすぐに慣れたの?」

「すぐと言う訳にはいかなかったけど、だんだんとな……それにしても真琴……相変わらず化粧つけも無いのな……女らしさも色気も無いし……高校の頃から成長してないぞ」

「何よ。こんな環境だから仕方ないでしょ。その気になったら私だって……」

功介のズケズケとした物言いに、むきになって言い返したが、こんな風に昔の様に功介と言い合える事が、真琴には何処か安堵した気持ちにさせられた。

さつきまで、クツクと笑っていた功介が、急に真剣な眼差しを真琴に向ける。その視線に気づいた真琴は、どうしたのだろうと首を傾げた。

「その気になったらって、誰が相手ならその気になるんだよ?」
え?

真琴はその質問の意味が上手く飲み込めず呆けた顔をした。すると又、笑い出した功介を、真琴は睨^{にら}んだ。

「やっぱり真琴はいつまでたってもお子ちゃまだな」

功介はそう言って、真琴の髪の毛を頭の上からクシャリとかき混ぜた。以前と変わらぬ功介の言動に真琴は頬を膨らませる。

「何よ、もう28歳なんだから……子供扱いしないでよ」

昔……まだ幼馴染から卒業していなかった頃、良く言われた言葉……真琴は遠い目をして、眩しい青春時代に思いをはせた。

「そうだな。俺達もう28になるんだよな……いろんな事、変わって行くのは当たり前か……」

功介は少し寂しげに、遠くを見つめて呟くように言った。その物言いが、やけに寂しく聞こえて、真琴は功介の顔を見上げた。遠くを見つめる功介の横顔は、やけに大人びて、知らない人の様だった。

変わって行くのは当たり前……。

それは、人も社会も環境も地球も……。

千昭は未来に川は無いと言う。

この地の川も、渓谷の底の水は水量がわずかだった。

大昔は豊かな水が流れていたのかもしれない。しかし、今の乾いた大地は、そんな水さえも飲みこんでしまったようだった。

変わりゆく地球環境を救う為に、千昭は過去に生まれ、未来で生きて行く、救世主の様に……。

そんな彼が、複雑な生い立ちでも、父を思い、母を思い、父親の描いた母の絵を求めて時間を飛び越えてやって来た。

この地の人達も、親が子を想い、子が親を想い、愛する人たちを守るために戦った結果がこの現状なのかもしれない。

どんとどんと移り変わる歴史の中で、変わらない人間の本质は、そんな想いなのかも知れない。

「いろんな事、変わって行くけどさ……人間の本質的な想いつて変わらないんだなって、変わらないものもあるんだなって、今の調査をしてると思うんだ……」

真琴は、また視線を遠くへ移すと、今回の調査を進めるうちに感じた事を、初めて口にした。

「変わらないもの？ 変わらないものなんてあるのかよ？」

「うん、どんなに人間を取り巻く環境が変わっていつても、変わら

ないものって言うのかな？　たとえば今調査をしている石仏に込められた想いとか祈りとか……そういう人間の想いって、昔も今も変わらないなって……きっと、未来でも変わらないんだろうなって、思うの。親が子を想う気持ちとか、子が親を想う気持ちとか、平和とか幸せとかへの祈りとか……」

千昭や功介が使命のように、誰かのために尽くす想いも、人間の遺伝子に書き込まれた変わらない想いなのかも知れない。

「そうだな……どんな時代になっても、変わらない想いはあるだろうし、そう信じたいよな……」

功介は誰に言うともなく、呟くようにそう言いながら、遠くを見つめていた。真琴も同じようにしばらく遠くを見つまた後、再び功介の方に顔を向けた。

「あのね、功介。私、先輩にプロポーズされたんだ……」

真琴は突然、話を変えた。自分でもどうしていきなりこんな事を言い出したのか、分からなかった。

えっ？と驚いた顔で功介は真琴の方へ向き直った。

「おまえ……先輩と結婚するのか？」

功介は、探るような眼差しで真琴を見た。真琴は、ただ首を横に振る。そして、功介と視線を合わせた。

「先輩への気持ちは間違ってるって言ったのは、功介じゃない？」

「あれは……千昭が言ったんだよ」

「でも、功介もそう思ってた……」

「真琴だつて、自分でそう思つたんだろ？ だから、断つたんだろ？ 俺が言つたからじゃないんだろ？」

「それは、そうだけど……」

「でも、断つてよかつたのか？ おまえの年齢を考えたら、最初で最後のチャンスだったかもしれないぞ」

功介はそう言つてニヤリと笑つた。

「そうよ！ 千昭と功介に責任とつて欲しいぐらいだよ。私が結婚できなかったら、あんた達のせいだからね」

真琴は功介の揶揄に煽られ、むきになって言い返した。そんな真琴をニヤニヤと笑いながら見つめていた功介はしばらく後、笑いを納めて真面目な表情になつた。

「なあ、真琴、俺、後半年したら、日本に帰ろうと思つているんだ……」

「えっ？ 一時帰国？ それとも……」

「ああ、NPOの活動を辞めて、帰国しようと思つてるんだ……」

「ええっ？ 最低5年はこちらに居るつて言つてたのに……どうして？」

「今の日本の医療事情を聞く度に思つていたんだ。確かにここには医療を必要としている人が沢山いる。だけど……平和で裕福なはずの日本で、救急体制が崩れて、どこの病院も受け入れてもらえずに亡くなる人が増えているし、地方の医師不足も深刻化しているし……なんだか俺の足元が崩れて行く様な感じがしたんだよ。実は、実

家の病院も医師不足で救急指定を今年度で取り下げようかと言う話が出ているんだ。いろいろ考えたよ。だけど、やはり俺の足元が崩れて行くのに知らんふりして、ここで活動が続けていて行く事が、俺の本当の望みだったのかって思ったんだよ。そして、この国のひと達も自分達の医療の足元を確かに行き行く事も大事だと思ったんだ。だから、これからはこの国の子供たちの中から医療を目指す子が出て来るように、教育への支援や学校づくりへの支援をして行こうと考えてるんだよ」

ひとたび自分の夢を語り出すと、その瞳に火が灯る功介の力強い眼差しが真琴に向けられる。

ああ、この人はなんて大きな視野で物事を考えているんだろう？ 真琴は、自分の事で一杯一杯になっている己の小ささが恥ずかしくなった。

「はあー、やっぱり、功介はすごいね」

真琴は溜息をつきながら言った。

「何言つてんだよ。一緒に活動している人たちは、もっとすごいぞ」
功介はそう言いながら、真琴の額を指で突いた。いつの間にか功介の瞳はさっきの熱いものから穏やかな温かいものに変わっている。真琴は、自分の心がじんわりと温かくなって行くのを感じていた。

「そっか……功介、帰って来るんだ……」

独り言のようにボソリと真琴が呟くと、功介はニヤリと笑った。

「そう言う事で、これから宜しく」

「何がこれからも、よ？」

「ご近所さんと言う事で……それとも、おまえ……ウチ、来る？」

「え？ 遊びに來いって言う事？」

真琴は、訳が分からず、功介の顔を見上げた。

「ばーか、責任とってやろって言うてるの」

功介はニヤニヤ笑いながら、真琴を見下ろした。

「責任？」

「そつ、さつき、おまえ言っただろ？ 責任とって欲しいって……だから、俺が千昭の分も一緒に責任取ってやるよ」

「えっ？ どう言う……」

事？と尋ねようとした途端、先ほどの会話を思い出した。先輩のプロポーズを断ったのは、功介と千昭のせいだと、責任を取ってほしいって……自分で言ったんだ……。

「もうー、からかわないでよね」

真琴は頬を膨らませて功介を睨^{にら}んだ。

#06：変わらないもの（前書き）

長い間、お待たせしてすみません。
いよいよクライマックスです。
どうぞよろしく願います。

#06：変わらないもの

「からかつてる訳じゃないんだ。千昭と再会してから、心のどこかでずーと思っていたんだ。でもあの時は、NPOの活動の事で頭が一杯で、真面目に向き合う気になれなかった……実は、また千昭に会ったんだよ」

功介はさっきまでの揶揄うような眼差しでは無く、真面目な表情で話している。

「え？ 千昭と？」

また千昭の名が出て来て、真琴は心が落ち着かなくなった。

「ああ、俺の居場所なんてどうして分かったのか知らないけど、俺を訪ねて来たんだよ。それで俺に言ったんだ。……真琴が近くに来てるから、会いに行行って……」

えっ？

千昭が？

真琴は思わず功介の目を問いかけるように見つめた。

「どうして千昭が……」

「うん、俺も驚いたよ。しばらく事務局へ行っていないかったから、真琴からのメールも読んでいなかったんだ。だから、真琴がここへ来てる事を知らなかった。千昭が会いに来た事も驚いたけど、真琴がこの国へ来てる事も驚いた。千昭にその辺の詳しい事情を訊けない様な雰囲気があつて訊けなかったんだけど……千昭は自分の言いたい事だけ言つて、消える様にいなくなったんだ……」

タイムリープして功介に会いに来たんだ……

真琴は、功介には会いに来る癖に、自分の前にはけして姿を現さない千昭を憎く思った。

真琴が黙っていると、功介は話を続けた。

「あいつ……高校の頃、真琴の事が好きだったんだ。おまえ、気付いてたか？」

「えっ？」

功介こそ、気付いていたの？

真琴の驚いた反応を見て、功介はクツクと笑った。

「やっぱり真琴は、鈍いよな……千昭も先輩も浮かばれないよ。まあ、俺も人の事言えないかもしれないけど……」

功介の言葉は最後の方は独り言のようにブツブツと何を言っているのか分からなかったけど、自分をバカにした言葉だと察した真琴は、不貞腐れた。

「鈍くて悪かったわね」

功介を睨んで言葉を返した真琴は、なぜ今頃になってそんな事を功介が言うのだろうと、考えていた。

「真琴も千昭の事、好きだったんじゃないのか？」

「ええっ？ 何言ってるのよ」

今頃になってそんな事を言う功介を、真琴は怪訝な眼差しで見た。たしかに、千昭の告白は無かった事にしかたかたくせに、他の誰かと仲良くしてるのを見るのは嫌だった。千昭はあんな風にいなくなってしまうから、ずーと心の中に居座り続けている。でも、それが恋愛感情なのかどうか、真琴には確信が持てなかった。

「あの頃、俺も3人でいる事が当たり前で、千昭が真琴の事を好きなのはなんとなくわかったけれど、俺は何もしてやらなかった。真琴も千昭の事が好きなのかなって思った事もあったけど、俺は3人のバランスが崩れるのが嫌で知らんふりしていたんだ。でも、千昭が転校してこなくて、真琴と二人だけだったら、あんな風に楽しい思いでは作れなかったと思う。今でも高校時代を思い出すと、ほんの数か月だった3人の時間が、高校時代の思い出の全てなんだ……千昭がいなくなった後、真琴との距離感が上手くつかめなかったよ……」

功介は、さつき真琴をからかっていた笑顔が消えると、また深刻そうな表情になった。そして、初めて聞く、功介の高校時代の想いに、真琴は驚いた。

功介も、同じ事思っていたの？

私も3人のバランスが崩れるのが怖かった。

「もう会えない」と言った千昭が、人ごみの中で消えた時、何かが崩れていくようで、怖くて仕方なかった。

手の中に当たり前にあったもの……変わるはずが無いと思っていたものは、幻でしかなかったと、理解したくなくて……。

真琴は功介の言葉を聞きながら、千昭と三人で過ごした日々を思い返していた。

まるで昔からの友達のように、私と功介の間にスルリと入り込んだ千昭。

功介の言う様に、三人だったから、楽しい思い出を作れたんだ。だから、最初は千昭が「俺と付き合えば？」なんて、簡単に言うのが腹立たしかった。

どうしてこんなに綺麗にバランスの取れているトライアングルを壊す様な事を言うのかと……。

「なあ真琴、俺が日本に帰ったら、結婚しないか？」

驚いて功介の方を見た真琴は、彼の真剣な眼差しに少し怯んだ。

「え？ 何言ってるのよ。私がさつき、先輩にプロポーズを断ったって言ったから、責任感じてくれるの？」

真琴は、今までと違う功介の雰囲気焦りを感じてしまい、茶化す様に言い返した。

「ばーか、さつき言った事を鵜呑みするな。俺は千昭の気持ちを知っていたから、自分の気持ちには気付かなかったんだ。でも、千昭がいなくなつて、真琴とどんなふうにつき合っていけばいいかわからなくて、危なっかしいおまえは、俺を頼ってばかりの癖に、簡単に友達と付き合えて言うし、そんな真琴になぜだかイライラしてたよ。だから、おまえに当てつける様に美浪と付き合ったんだ。美浪の気持ちも考えずに……」

「今更何よ。バカなのは功介でしょ。美浪の気持ち弄んで……私だって、いつもお子ちゃまだってバカにするから、功介や美浪に置いて行かれる様な気がして、先輩と付き合えば私も大人の仲間入りできるか持つて……皆に追いつけるかなつて……」

なんだか無性に腹が立つて来た。

真琴は今までの事を振り返ると、なんて幼稚な事してきたのだろうと自覚している。でも、それもこれも、功介のせいだったんだつて、今改めて怒りが湧いてきて、功介を睨んだ。

しかし、そんな真琴の睨みなど気にも留めず功介は苦笑して、真琴を優しい眼差しで見つめた。功介のそんな眼差しの前に、結局真琴の怒りはしぼんでしまった。

「俺達、二人ともバカだよな。千昭がさ、最後に言っただ。真琴

を頼むって、おまえだから頼むんだって……そんな事、千昭に頼ま
れなくても……でもさ、俺達が結婚すれば、心の中で千昭も一緒に
いる様な気がしないか？」

なんだか妙に功介の言葉が真琴の胸の真ん中にストンと落ちてき
た。

それは、はるか昔から決められていた運命のように、そうする事
が当たり前のように、真琴の心に染み込んでくる。そして、懐かし
くて、安心のできるこの安らぎのような気持ち、心の中に変わら
ないものとしてしまわれていた事に、真琴はやっと気付いたのだっ
た。

「それも、いいかもね」

真琴は遠くへ視線を向けると、独り言のように呟いていた。

#06：変わらないもの（後書き）

本編はここで終了です。

後、もう一話、千昭視点のエピソードがあります。

それで全ての謎が解ける予定（？）です。

あまりお待たせせずにアップしますね。

#00：エピソード（前書き）

いよいよ最終話です。

千昭視点のエピソードです。

#00：エピソード

千昭は遠くから並んで座る二人の背中を見つめていた。

二人の声は聞こえないけれど、千昭には何を話しているのかは何となく分かっていた。

「これでよかったんだよな」

その言葉は自分に言い聞かせるように声に出すと、異国の風の中に消えていった。

タイムパトロールに見つかって自分の育った時代に連れ戻された千昭は、裁判にかけられ、タイムGPSを体に埋め込まれた。永久じゃ無くてもある一定の期間はタイムリープが禁止されるだろうと千昭自身覚悟はしていたけれど、彼の研究と教授の助言により、タイムリープは禁止されなかった。その代わり、彼の動きは常に監視され、真琴に近づく事及びかわりを持つ事は禁止されてしまった。

遠くから真琴を見つめる日々……そんなひと時が素の自分に戻り、癒される時間だった。だから、真琴が自分の気持ちに気付かず苦しんでいるのも分かっていた。あの元気で屈託の無い子供のような笑顔の真琴から、少しづつ笑顔が消えて行くのを、千昭はなすすべもなく見守ることしかできなかった。

そんな時、ほんの気まぐれに父親のルーツを辿ってみた千昭は、思いもよらない真実に辿りついてしまった。

それは、功介と真琴の息子だった。

二人が結婚しなければ、二人の子供が生まれなければ、千昭は生まれてこない。その事実が、酷く納得できた。あの高校2年の時、功介や真琴との出会いは、まるで昔からの知り合いのように違和感がなく、すんなりと3人である事に慣れていった。なのに、この事

実は思いのほか彼を打ちのめした。

その上、千昭が二人の前に現れた事が、巡り巡って功介と真琴を遠ざける結果となり、未来が歪み始めたのだ。

俺なんか生まれてこなくなつて……そう思つてはみても、あの二人から俺に繋がる全てが消えてしまえば、歴史はどう変わつて行くのだろう。

その事に、責任が持てるはずもない千昭は、思い悩んだ末、功介の記憶を戻して、もう一度真琴の方に気持ちに向くように誘導しなければと考えた。

功介の中には真琴への想いが眠っているはずなんだから……。

しかし事態は予想以上に悪化していた。功介はNPO活動のために日本を離れる事を決めていて、真琴との間のどうしようもない物理的距離が、二人を隔てる事となつた。

それでも功介は、日本を発つ前に真琴と話をしてくれて、お互いにすれ違つていた気持ちが少し近づいたようだった。少しでも早く二人を元の関係に戻さなくてはと、徐々に歪んで行く未来に気持ちばかりが焦る千昭は、同じ国へ来ている真琴の連絡にも気付かずにいる功介に焦れて、再び功介の元を訪れて、背中を押した。

千昭はいつの間にか二人から目をそらしていた。

二人から自分に関する記憶の全てを消してしまわなければと、千昭はもう一度二人に視線を向ける。

もう、これで最後だ。

もう二度とこの時代には来る事は無いだろう。

真琴、幸せに……

記憶を消しても、真琴の中から完全には消えないだろう。否、消えないでいて欲しいと、いつか思い出してほしいと思つている自分に、千昭は舌打ちしたい気分だった。

遥かなる時の流れの中で、俺の想いは何処へ消えて行くのだろう。
いつか、二人の遺伝子が、長い時の旅を続け、俺の生きる未来へ
到達する時まで……

「真琴、未来で待ってる」

f i n

#00：エピソード（後書き）

最後まで読んでくださった皆様へ

長い時間をかけて書き連ねてきた私の妄想話にお付き合いくださり、本当にありがとうございます。とうとう最終話を更新する事が出来ました。これで本当にお終いです。

いろいろな感想があると思いますが、広い心で受け入れてくださると嬉しいです。時かけファンの皆様、お怒りの感想もなく、最後まで温かく見守ってください、ありがとうございます。皆さんの心の中に幾通りもの時かけがあるように時かけの世界は永遠です。

長い間ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5235j/>

遥かなる時の流れの中で（アニメ映画「時をかける少女」続編的FF）

2011年8月9日23時22分発行